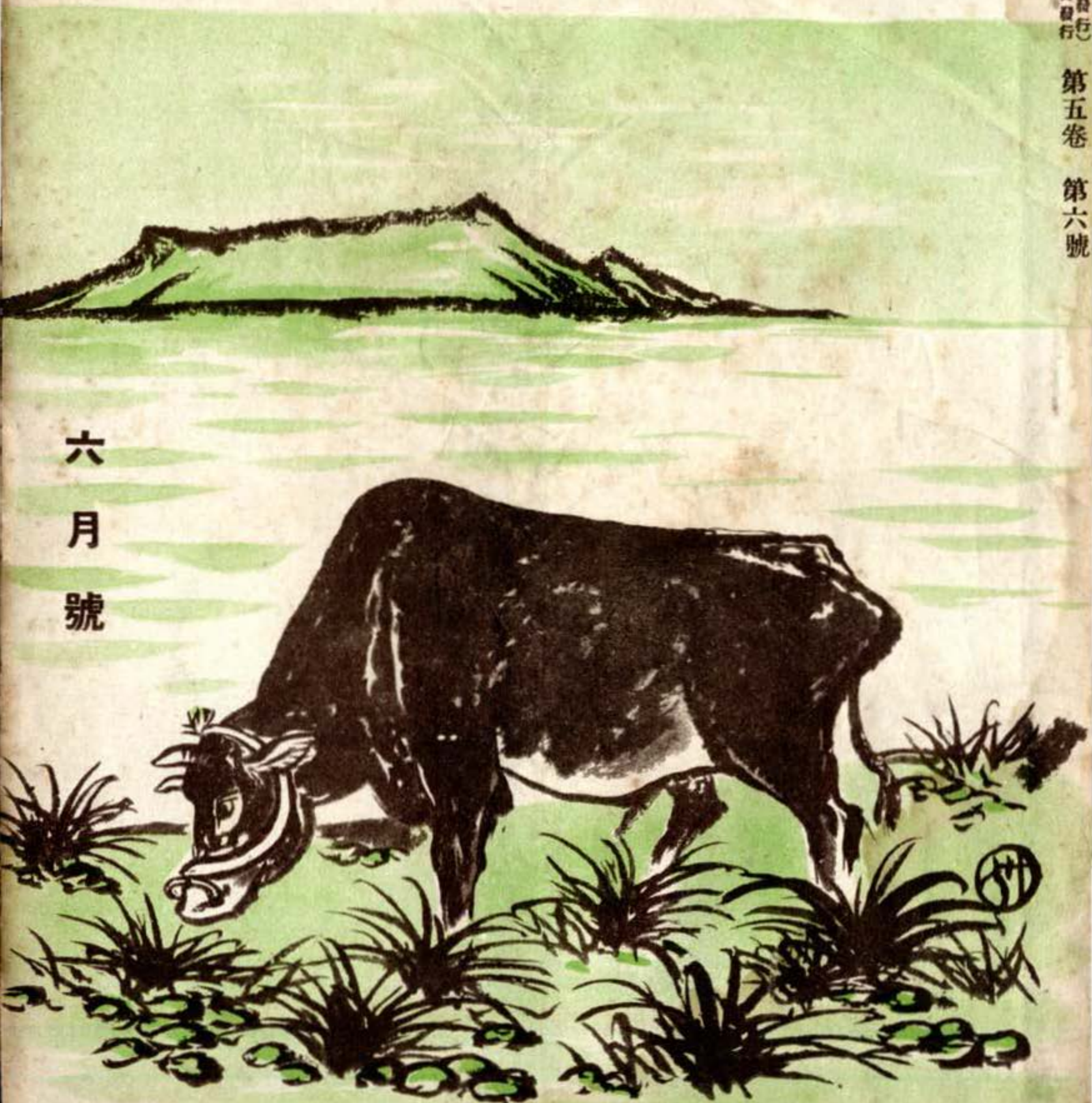


淨土

昭和十四年五月廿日第三種郵便物認可
昭和十四年五月廿日印刷納本
昭和十四年六月一日發行

第五卷 第六號

六月號



◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために身命を賭した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時参加して下さい。

病院
慰問

白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります。

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜参加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務宛に！ 領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜

東芝
京公
市芝
芝國
區地

淨土宗務所

振一
替五
口一
座一
東一
京番

講話

淨土信仰の眞髓は實にこの一文に盡く！

日本信仰史上に燦然と輝く法然上人の『一枚起請文』。この一文の中に籠る信仰の精神を知らずして、信仰の何々たるかを語るは潜越である。この簡潔流麗なる語句の中に脈うつ深く豊かな宗教の眞理が當代隨一の名講義によつて、解り易く讀者の心に滲込んで行く！

中村
辨康著

一枚

布教用書の
最高峰

起

請

文

宗教講話に新生面を開いた名講義！

定價 拾二錢
送料 共

發行所

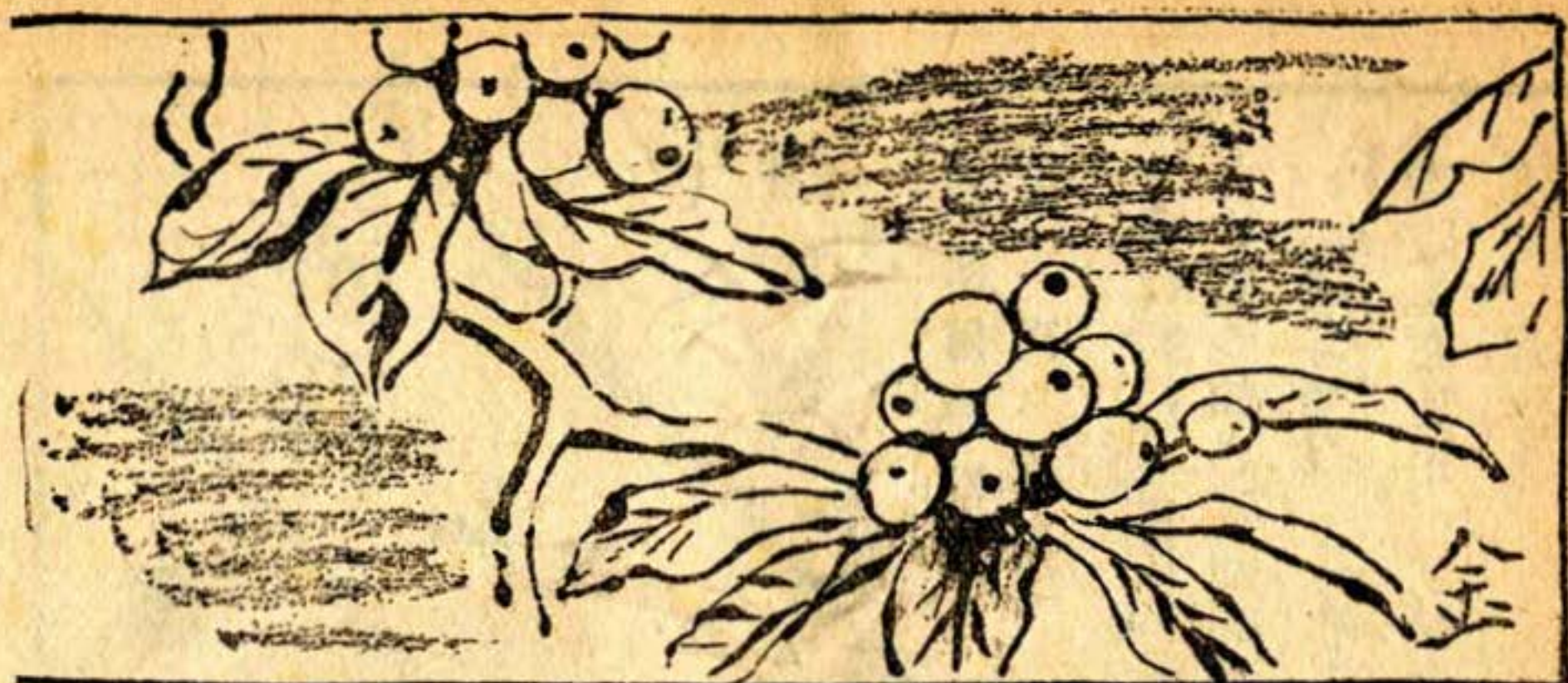
法然上人鑽仰會

振替……東京八二一八七

本會は特に淨土信仰普及のため左の如き犠牲的奉仕をなす

一度に十部以上
購入されば 一部當り 九錢（送料不要）

寺院の布教用、工場會社等の修養讀物として、最適！



◇ 淨

土

第五卷
第六號

六月號

目次◇

表紙・扉繪

目次カッ

熊倉鎮雄

鈴木金平

遇然か因縁か

大島徹水

(六)

善惡の彼岸

佐藤賢順 (三)

念佛三想

金田明進 (三)

人生坦々

中野尅子 (四)

高僧物語 骨を喰ふ行誠上人

福田有誠 (八)

隨想 今年の花祭り

相馬黒光 (元)

法衣の牧將軍

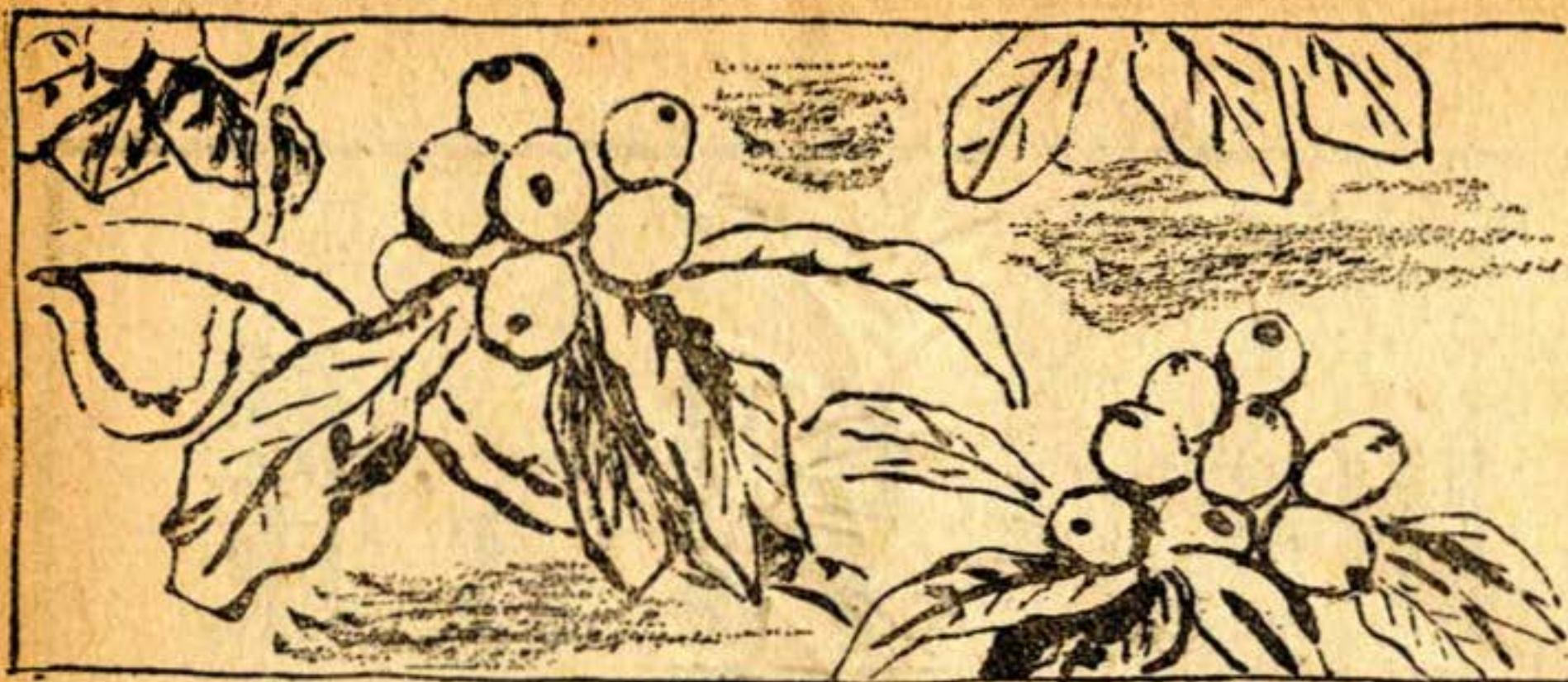
見山望洋 (四)

戒律生活を語る座談會

(元)

信仰相談

中村辨康 (四)



銃後美術談

英靈に捧ぐ萬靈供養……………本誌記者(一六)

隨筆

家

畜

篠原文雄……………(一五)

本會婦人部

新綠慰問傳……………渡邊榮子……………(一四)

現地より

岳陽樓上に立つ……………安田秀賢……………(一四)

二光鳥は來鳴く……………吉田絃二郎……………(一六)

小説殘

雪……………一瀬直行……………(一三)

趣味鮎

物語

り……………藤木杜子……………(一四)

歌俳

壇壇

與謝野晶子選……………(一五)
太田耳動子選……………(一七)

日常勤行解説

死なない身となる……………中村辨康……………(一六)

鑽仰運動ニュース

編輯後記……………(一五)

◇淨◇

土……………第六卷 第六號 六月號 目次◇

健康の安全地帯

朝夕一球宛の

「理研ビタミン」で……

風邪をひかなくなる
結核を防ぐ力がつく

見よ！この力價！

理研ビタミンは細粒のビタミンAとDを最もよいグロビュール球に包んだ強力製品です。一球中に七七〇〇國際單位、すなはち鰵肝油二十五分のビタミンAを含有し朝夕一球宛の常用で断然抵抗力がつき、呼吸器が強化され、風邪をひかなくなり結核も預防される。國民衛位の向上に理想的營養劑として推薦される。

理研ビタミン

(包裝)

四十球入 百球入
五百球入 千球入

婦人子供用小粒製品

五拾球入 一、三〇
百球入 二、五〇

淨土

六月號

佛道修行は

よくく身をはかり

時をはかるべきなり

法然上人御法語



三 來
夜 話

偶 然 因 縁 か

増上寺法主
大僧正

大 島 徹 水



さきごろ、東北地方巡教のをり、某師團でかういふ話をきいた。——その出征將校のひとりが戦地で重い熱病に罹つたのである。軍醫も頭をかしげる、いや、十のうち八分は覺束ないと云つた容態であつた。ところがその將校は寢ても、覺めても病死はいやだと云ひつづけた。さいはひ、この將校に少康の日がいくらかつづくやうになつた。するとかれは、もはや我慢がしきれなくなつたのだ。ベッドのうへで前線に立つことを志願した。深夜、ひそかに病室をぬけて、司令部に哀願行をした、死が遮けられぬなら彈丸雨飛の中で殞れることを！そして、遂に、かれのまごころは天に通じたのであらう。かれの志願が適へられたのである。生死を超えたかれの身心は、まるで天の羽衣にふんはり包みこまれたやうな輕快さを味ふのだつた。よろこび勇んで、かれは戦線に立つた。山岳戦に、野戦に、市街戦に、——かれはいつも陣頭に立つて味方を鼓舞しつつ働きまはつた。何度も戦功を立てた。それらの戦ひで、多くの同僚と、多くの部下を失つた。ところが決死の勇にはやるかれには、ひとつの彈丸もよけて通るかのやうであつた。かうしてかれは縦横無盡に戦つたのち、ふたゝび病院に戻つて來た。すると、ひとたび張り切つた弦が力をぬかれたやうに、なよなよとかれの肉體がしぼんで行つた。まへと同じ病室のベッドのうへで、病勢革まつたかれの魂はつひに遠いところに去つてしまつた。大和魂が、肉體の不調を克服して、その精華を遺憾なく發揮した、好個の實例ではないか、とひとがいふ。もちろん、さうである。しかし、あとになつてふり返つてみると、その將校のはたらきは偶然の機會にめぐま



れたやうだ、と他のひとはいふ。わたしは偶然を信じない。因縁なのである。深いふかい因縁があつたればこそである。

いつたい、兵士が戦場にあつて身命を輕んじて勇を振ふところとは何であらうか。君に仕へる忠の道について、石田榎巖がをもしろい譬へばなしを語つてゐる。

『まづ手足は口のために使はるゝなり。如何となれば口が物を食はねば、手足安穩なると能はず。このゆゑに、手足が苦勞して、一代、口のために使はるゝと云へども、少しも不肖らしきことなく、口に忠を盡して能く事うまつるものなり。君に事うまつる道も、手足の口に使はるゝことを法とすべし』つまり口あつての手足、君あつての臣下、である『君に事ふる者は、すべて臣と云ふ、「臣は牽なり」と註し、心、常に君に牽かるゝなり。』とも同じ著者は云つてゐる。

皇軍將士の赫々る戦果を修めしめる行動を導くものは何か。いふまでもなく、大御ごころの尊さである。天皇陛下に捧げたいのちには私の生も、私の死もあらうはずがない。天皇陛下の命のままに、手足となつて活動してこそ、かれのいのちがはじめて意義をもつやうになるのである。

さきに掲げた將校の場合は、この日本臣民としての忠誠、まごころの迷りが、天に通じた一例にほかならない。はじめ戦地の病院で重態になつた、病死をきらつて前線で散りたいと志願した、君に仕へる武士のころとして當然である、そしてねがひが適へられて奮戦に立つた、もはやかれの思ひには生も死もない、あるものは大御心に添ひたい氣もちばかりである、つひに數々の戦功をのこしてこの世を去つた、たゞ戦線ではなしに再び元の病院で瞑目したのであつた——かうしたかれの生涯を取出して、偶然がさうさせたと云へる理がどこにあらうか。

日本國民として、わが大君の忠誠の赤子として生まれ死んだ、ありがたい因縁を感じ、わたしはひたすらな合掌をおくりたいとおもふ。(了)

高僧物語

骨を喰ふ行誠上人

福田 有 誠



昭和末より明治の時代に亘つて佛教界にその人ありと知られた高僧福田中、特に傑出してゐた福田行誠上人については、その人となり、文集、逸話等詳しく行誠上人全集（明治三十九年東光社發行）や行誠上人文集（昭和六年東方書院發行）に載録されてゐるので、こゝでは上人の傳記を簡單に紹介するにとゞめ、私が、師の福田循誘和尚から直接承つた逸話などを少しく申し上げてみたいと思ふ。（寫眞は行誠上人）

上人略傳

文化六年四月九日江戸豊島の地に水野家家老の息として生れたのが行誠上人であつた。

六才傳通院伴頭寛淳上人に就いて出家得度をされ、後傳通院貫

主玄順上人の門に投じた。

十七歳京都に遊學し、各宗の學匠を歴訪して顯密諸宗の研究に力めたが、特に天台の慧澄律師などの感化を受けられたのであつた。

文政十二年二十歳の冬、一先づ江戸に歸り傳通院内の四休庵雄照窟の寮主となり、爾來、佛道教經、天台四教義、菩薩戒義疏、決答疑問抄、教誡律儀、成唯識論等、諸般について講苑を敷きその蘊奥を傾けられ一世に其の碩學を尊はれたのであつた。

嘉永五年上人は四十四歳にして傳通院學頭に進み、更に慶應二年五十八歳兩國回向院の住職となつた。

明治九年六十八歳で傳通院貫主を拜命、翌十年淨土宗大教院教頭に補せられた。

次いで明治十二年七十一歳にして増上寺に晉山し爾來七年間淨土宗東部管長として宗教界擾亂の時勢に處してよく佛教界を統率されたのであつた。

明治十九年病を得て其の職を辭し、深川本誓寺中の寒林舎に隠栖されたのであつたが、教界は時勢の變動によつて粉擾益々甚しく、五大山法主同時に職を辭され、混亂其の極に達した折柄上人は請ひを納れ、病を推して智恩院門跡、淨土宗管長の職に就いたのであつた。

然るに教界の狀勢漸く收まつた頃病いよく重り、翌明治二十一年四月二十五日八十歳を以て往生の素懷を遂げられた。

葬儀は上人の遺言通り、拂子なしの無導師、阿彌陀經だけと言ふ簡略なものであつたが、信徒は申すに及ばず當時の顯官名士雲の如く華頂山内に集り、上人の遺德を追慕したと言ふ事である。

この師この弟子

六歳にして出家した行誠上人は、始め大堂と稱した。

「大堂や、そんなに本ばかり讀んでゐるに、少しは世間の事や、經濟の事なども考へなさい」と師の坊に注意されるほど、掃除にもしんたくにも書物を離さない。好んで法死に連つてゐる小僧の姿は當時傳通院界隈の變り者と言はれてゐた。少年大堂はきたない着物を左り前に合せたり足袋を左右反對にはいたりして平然としてゐた。

其の頃駒込の西教寺に潮音と言ふ僧侶がゐた。酒屋の伴であつた潮音は好んで佛門に入り、眞宗本願寺派の寺にもらはれてその娘と娶され様としたが、きゝ入れず、生涯律僧として過した僧である。その女も又潮音師の身廻りの世話をすると言つてきかず生涯潮音師の側女としてつくされた奇篤な女性であつた。

ところで、大堂はこの潮音師が非常に好きでいつもその説法の座に通つてゐた。或日潮音師は『大堂、今日は珍らしい御馳走を喰さしてやらふ、わしについておいで』と言ふ事で、大堂よろこんで潮音師の後に従つたのであつた。大堂は何處か立派な料理屋にでも行くのかと思つてゐた所、何と行つた先は檀家の年回法要の席であつた。

失望した大堂は、『私は淨土宗ですから眞宗の法要は御免蒙ります』と不平をかこつて決然歸らうとしたが、潮音押へて、『まあ待て、扱ておやぢ、今日はめづらしいお客さんを連れて來たからお經の前に御馳走を出して下され』と主人を擡へての注文である。



主人もさすがの大堂も啞然としてゐたが、悠々と御馳走を食し終つて、

『さあ大堂お前は先に還れ、わしはこれからぼつ／＼仕事に取りかゝるわい。』

物にこだわらぬ洒脱な行誡上人の風格の一面は私淑せるこの潮音師から傳へられたものか。(上掲寫眞は行誡上人自畫賛)

お米が足らぬ

京都遊學の頃の話である。十七歳の時上洛した師は、吉水の眞葛庵に住んでゐた。毎日かゝさず、嵯峨の清涼寺や天龍寺、扱ては叡山其他諸宗の碩學を訪門して研鑽を續けてゐたのであるが、其の學資は母の智鏡尼から月二分(今日の五十錢位か?)宛頂いてゐたのであつた。

その内一分で一月の米を買ひ、他の一分を學資に充てゝゐた。始めの一、二年は一分で買つたお米が丁度一ヶ月の食料として役立つてゐたのであつたが、二年ほどたつた或月から、月末二三日の米がどうしても足りない。まさか米屋でごまかすわけもなからうかと、例ののんきな上人は不審に思ひながらも二三日は水など飲んでどうにか間に合せてゐたのであつた。

二月、三月たつ内に、さすがの上人も、やり切れず、米屋に談

判を申し込んだ。

「冗談じゃありませんよ、最近のこの米相場を御存じないのですか」

世間學に相當自信があつた筈の行誠も物の値段と言ふものにはやつとこの時氣がついたと言ふ事である。

羅漢の行誠

行誠上人の事を世間では一名羅漢様と呼んでゐた。それは上人の顔が所謂羅漢面をしてゐたといふ譯ではなく、羅漢供養を終世の行事としてゐたからであつた。

上人は慶應二年傳通院學頭より兩國回向院住職に推されたのであるが、上人は常に檀家のあるお寺に住職する事を嫌つてゐた。所がえりに選んで、檀家の殊に多い回向院に行かねばならぬ事になり、「わしは常にお寺をえり好みした罪の報ぢや」と言つてぞんげされた。

有名な羅漢の行誠は回向院での出來事で、檀家の加藤金兵衛と言ふものが、子供の供養に是非何か寄進したいと申し出た。その頃上人が、特に交を厚くしてゐた菊地容齋と言ふ畫家が大へん生



活に困窮してゐたので、上人は菊地畫伯の窮狀を見かねて、羅漢の繪を加藤氏に寄進させたのであつた。之が有名な五百羅漢であつて、上人が終生供養した行誠羅漢の緣起である。

五十の歌ならひ

歌人行誠の名は明治の世代にあまりにも有名であるが、而も五十歳にして始めて歌道に入つたとは知る人ぞ知る事である。

上人に始めて和歌をすゝめたのは弟子の三宅大蔵であつた。五十を越した門弟行誠は弟子大蔵を師として歌道に専念した。

熱心は恐ろしいもので、一年足らずして大蔵などの到底及ぶ所ではなくなつた。

明治大帝の御歌所であつた高崎正風氏、皇后宮の御歌所税所教子女史と共に行誠上人は當時の三歌人として有名であつた。

秀れた上人の歌の中でも特に、
いたづらに枕を照すともし火も

思へば人の油なりけり
と言ふ歌などは畏くも明治大帝の御意にあづかつた傑作と言はれてゐる。

山猿のさるより赤き衣きて

大方はじめの柿の種かな

と言ふのなど狂歌じみて、和歌としてはどうか分らぬが、明治十年増上寺に晋山した折の感想として上人の風格を示す酒脱をきわめたものとして面白い。緋の衣を着たなり、庭に下り立つて捨て狗とたわむれて歌をよんでゐる上人は一茶か良寛に通ずるものがある。而もなほ一世の大政治家にも擬せられたのであつた。

上人と權田雷斧

學德一世を風靡し、酒脱又人氣を集めてゐる折、他宗派の高僧、碩學踵を連ねて行誠上人を増上寺に訪れたのであつた。

晩年に於ける上人の説法は常に信徒本位であつて、むづかしい事は言はず誰にも分る程度のものであつたがそれが却つて専門家の間の惡評となり、山師權田行誠の面皮をはいでやらふと意氣込む若僧もあつた。

或時眞言宗の權田雷斧師が、法座の末席に加はつて行誠上人の説法をひそかに聞いてゐた。若い權田師は、行誠上人の説法の愚

劣なるをあばいて、對論を挑まんとしたのであつた。さすがにそれをみぬいた上人はその日に限つて宗、餘乘を眞言の碩學に納得行く様に専門的に説き進んだ。以來權田師は生涯上人を師として歸依されたのであつたが、後權田師が病重く、大正大學長の任を辭さんとした時、行誠上人が夢の枕に立つて、「もうすぐ回復するから辭する事はない」とさとされたと言ふ事など今はなき權田上人の語り草であつた。

南條博士と上人

南條文雄博士が若くして洋行から佛教學を修めて歸國した時先づその蘊蓄を傾けんと思ひ當時その人ありと知られた碩學行誠上人を増上寺に訪れたのであつたが上人は會ふなり博士の足を頂き、所謂接足作禮をして、「あなたはお若いのに、洋行され、佛祖の御遺蹟まで參拜されておいでになつた。私は靈跡をふんだあなた御足を佛祖の御足と思つていたゞかせていただきます」といんぎん丁重をきわめたのであつた。

當の南條博士は歐洲で佛敎の學問を究めては來たが、實は印度に立ち寄らなかつたので、上人の動作と言葉に冷汗三斗の思ひをなした。其後博士はわざ／＼印度に佛蹟を參拜して上人の遺德に報ひたのであつた。

博士は終世上人の御偉徳をなつかしみ、特に接足作禮の思ひ出を語られた。

牧師に念佛をすゝめる

行誠の名は當時佛教界のみでなくキリスト教界にも、一般世間にも知れ渡つてゐた。

或日キリスト教の有名な牧師が、その教義について佛教界の行誠上人を増上寺に訪れた事があつた。牧師は行誠何ほどの事やあると論議、佛、基の優劣を斷じようと意氣込んで來たのであつた。

丁度別時念佛に登壇する所で急がしい時だつたので客に待つてもらふ事にした。上人が客間の前を通つて本堂に出様とした折、客人を待たしてある事に氣づき、寸時立ち寄り、『あなたも本堂へいらつしやい。一緒にお念佛を稱へませう。さあ、』

と牧師を導通するのであつた。何のことだけりもない上人の態度にのまれ牧師も強て斷れず、しぶ／＼本堂に參詣したのであつたが、始めの論争の氣力も今はうせて、ひたすら上人の徳に引き



入れられ、無二の法友となつたとの事である。

行誠骨を喰ふ

上人は非常にものにこだわらぬ人であつた事は前にも述べたが、特に僧侶は信徒に對していかめしく威儀を正し勝ちのものであるにかゝはらず行誠上人は信徒に對しても

本當に親しみをもち開つ放しであつた。

ねずみの食つた供物のお菓子など、『端の方ねずみ少々……』などと書いて平氣で贈物として下されたものである。信者も又上人の眞情と洒脱に心から歸依した。

或時某僧侶がその頃の僧侶の墮落を慨歎して上人に申し上るのに

『某坊さんは最近平氣で魚を喰つてゐますが、實になげかわしい世の中になりました』などと大變當時の僧侶を皮肉つてゐるのをきいた行誠

上人

『ハハア、仲々今の坊主はぜいたくでいけませんな、私たちの若い頃は魚の身の所などは喰べたくとも仲々もつたいたくなくていたが、けなんだ、私などはいつちも骨ばかりを喰つてゐたもんですよ』

大阪の或る水商賣をしてゐる信者が息子が大変な道樂者で、親の意見はどうしてもきかぬので、或日上人のもとを訪れてその御教化にあづからせやうとした。上人その息子に申される事には、

『あなたは今迄も随分と親孝行をなされてゐた様ですが、これからもどうか親たちの罪ほろぼしをして孝養をつくしてくれまます様に。然し親に心配させぬことも孝行ですよ』とのみ申されたと言ふ事である。

大福 十念

上人の弟子を愛する事は又一方ならぬものがあつた。弟子も又上人の愛に感じてかゆい所に手のとくほどに心から師にかしづいてゐた。

後年上人が知恩院門主に推され浄土宗管長に就任の交渉を、吉水玄信、秦義應師らから受けた時も、弟子の循誘和尚に向ひ

『お前が一緒に京都へついて行つてくれるならわしは引きうけるが、お前が行かぬならわしも止める』と言はれた。知恩院でなくなられる時も臨終で弟子等の行く末を心配されてゐたといふ事である。

循誘師も師の上人に對しての禮は決しておろそかにしなかつ

た。師弟同席の折など、弟子は決して師の前ではお茶などに手をつけなかつたので上人は半分を飲んで、半分を弟子等に下げる様にしてゐた。

北海道巡錫の時の事であつた。山路を弟子の循誘と二人とほとほと次の寺まで歩いてゐた。

上人は大福餅が殊の他好きであつたので循誘師はいつも二錢か三錢位の大福餅を上人のたもとに入れておくのを常とした。今日も山路の長道中にいさゝか空腹を覺えた頃、上人は例の好物大福餅をうまさうにばくつき始めた。

丁度其の時である。隣の寺の世話人信徒等が村境迄出迎へに来て木蔭に休んでゐたのが上人を見つけてどや／＼とその廻りにつめかけて御十念を待ちかまえた。上人は大福餅を口にふくみながら、かまわず『モグ／＼ナム／＼……』と辛じて十念を授けたのであつたが弟子の循誘和尚まごつくまいことか、冷汗三斗の思ひをしたと言ふ事である。

上人各づけて『大福十念』といひその時の大福の味を時々なつかしんでおられた。

×

×

×



朝鮮 墨江八年坊
大空はありがたきかなみ佛の心に
似たりひろやかにして

評 信仰に徹して眺めれば一切の現象は
そのまゝ佛の姿である作者が眼をあ
けて大空を仰ぎ素直な心に思はず
した消息が素直に一首にあふれてゐ
る

大阪府 木全 重弘

生神とをろがみまつるすめらぎの
御爲ぞ何ぞ命惜しまん

評 今月も亦聖戦下の感動を詠んだもの
が多い。然もそれ等の歌がいづれも
いきいきとした實感にあふれ、人の
心を打つものが多いのを見て、國民
感情が波の山のやうにふくらみ、盛
上り、迫力を持つてゐるのを感じさ
せられる。この歌は捨身奉公の調子
の高いものである

和歌山縣 奥村 映水

訛りある國言葉もて召されゆく子
を囁ましぬ髪しろき父

評 その光景眼に見ゆるが如くして涙の
もこほされる作である

北海道 淺野 純

歌よむと白紙を置ける灯のもとに

蟲多く寄る春の宵かな

金澤市 高橋 勇

聖戦に身をなげ入れて武士の誠の
心いま盛りなり

徳島縣 丸岡 長壽

ひんがしの空白むころ母川の岸邊
に來ればつづろ鳴くかな

京都府 京谷 幸三郎

その華著は銃とる身にも沁みぬべ
しとくうちにはへ鉢の紅楓

北海道 佐伯 利則

北國の春はなつかし待ちわびし物
の芽香る中に歌よむ

栃木縣 大輪 云海

日の本の輝く春を明るくす櫻の花
の下を歩めり

三野輪 幸

渡舟バスをのせたり河原には雲雀
の聲すかげらふの中

中野區 三浦 眞子

征ける子に送りたまふか老母は靖

國宮の化をひろひぬ

盛岡 小平 京

たたかひの庭におくりて年を経ぬ
子よ強かれとそれのみ祈る

姫路市 海一 客

大陸に戦ふ友にふるさとの春を思
へと花を封じぬ

小樽市 中村 茂壽

子等は皆興亞の念に旅立ちぬ老の
身一人家を守るかな

奈良縣 井定 好

みいくさにしたが父はいづくぞ
や子は安らかに母の手に寝る

東京 小泉 妙春

妻逝きて五七日忌も明けぬ間に一
人子置きてみいくさに行く

千歳縣 高橋 美也子

のぼりゆく山のみ寺の山櫻見ぬ間
に色のうつろひにけり

小樽市 中村 もん

朝霧は陽にうすれゆき野も山も青
葉に光る六月となる

静岡県 一向 山人

人の世にいくさは絶えじみ光の中
に住まへば救はるゝかな

香川縣 堂木 はち

ゆく末は知らずかにかく盛りなる
野路の花には心ひかるる

東京 神田 靜念

ランドセル背にする子らの菜の畑
を馳せゆく見れば我子戀ひしき

滋賀縣 二宮 定道

快よき初夏の風葉櫻の裏を返して
歌ひつつゆく

大阪府 清水 明定

晩鐘の野にわたる頃さへづれる雲
雀の止みて春の暮れゆく

大阪市 渡邊 明道

うまれざるむかしのまゝに安らけ
き命得ましぬ聖の君は

京都府 貝利 吉

花を見る人多く立ち圓山のここに
も咲けり八重の花びら

北海道 花田 順住

いつしかと谷間の雪も消えはてて
夜半の寒さを忘れけるかな

兵庫縣 渡邊 眞行

幼児のみまかりゆきし魂は呼び
てあるらん此の父母を

盛岡縣 留 やす

初孫が級長とききられしさに言葉
も出でずただ涙湧く

茨城縣 小野 佐三

胸を病む我等をみとる看護婦の病
みて血啼くはいと悲しけれ

投稿規定

官製はがきに一回二首以内
とし「浄土」編輯部歌壇係
あて送ること



筆 隨

三光鳥は來鳴く

吉 田 絃 二 郎

今年も二三日前から庭の櫻に三光鳥が來鳴くやうになつた。
一昨年まではどんなにか三光鳥を待つてゐたことであらう。
三光鳥の聲を聴くことにわたしは武藏野に住むことをうれしく
思つた。

五月六月の薄曇りの日、そして青葉蔭の微風がひいやりとす
るやうな日は、たいてい家にゐても郭公を聴き、三光鳥を聴く
ことができた。

エゴの白い花が咲き、麥の穂が出るころになるとたいてい三
光鳥が啼き、郭公が訪れて來た。武藏野に住むやうになつてか
ら、わたくしたちは何んなにかその日を待つたであらう。

しかし現在のわたくしにとつては武藏野の郭公を聴き、三光
鳥を聴くことは耐へがたいことになつてしまつた。

花が散り、嫩葉のころが近づいて來るにつれてわたくしは三
光鳥の聲を恐るゝやうにさへなつた。

わたくしは郭公や三光鳥を聴かぬ都會の眞ん中へ引つ越さう
かとさへ思ふやうになつた。

わたくしは朝早くから日本橋のデパート迄出かけて行つた。
然しそこには美しい西洋の草花が飾窓に並べられてあつた。

一昨年の夏、わたくしが最初にもとめて病院の病室に運んで
行つた美しい花が咲いてゐた。

ベッドに横たはつたまま、青い空を眺め、窓際の草花を眺めて
ゐた寂然たる妻の眼が魅へつて來てわたくしの腸を抉る。

わたくしは食堂にはひつて行つた。
誰もが幸福さうに銀のフォークを動かし、ナイフを握つては

談笑してゐた。わたくしは黙々として匙を抱へてゐた。
病人の眠つてゐる眼を見ては病院の三階の食堂に行つてたゞ

ひとりフォークを握んでゐた日のことを思ひ出した。わたくし
は朝も晝も食卓に凭りかゝつて人知れず涙を拭いた。



隣りの部屋の人たちがうれしそうに退院した日、妻も武蔵野の家に歸りたいと言つた。

三越から夜具が出来て来た時、夜具の模様を見せてくれといつたので、わたくしは一段高く椅子の上に立つて、夜具の模様を見せてやつた。草地に花、橋の模様であつた。妻はうれしそうに微笑んだ。

今日もわたくしは人いきれするデパートの食堂の中にたゞひとりフー・ークを握つたまゝ俯向いてしまつた。

都會の眞ん中も現在のわたくしにとつては信濃の山の中よりも寂しかつた。

わたくしは窓の外をながめた。雨が降り出してゐた。

死ぬばかりさびしき心いだきつゝ

われ生きてあり雨の降りをる

×

「さびしさなくばうかるべし」といふ言葉はすべての哲人にも、歌人にも眞實である。人はさびしさを見失ふ時俗人に墮する。

さびしさの底に徹して宗教があり、欣求の念が湧く。

九十年の生涯を孤獨の裡に精進したミケランゼロ、壁になつて尙耐へ忍んで行つたベエトウゼンを思ふ時、わたくしどもの弱い心は勇氣を賦へられる。

宗教によりて悲しみを救はれるといふことは悲しみを忘れるといふことではない。さらに悲しみを深くすることである。悲しむべきに悲しむことを忘れるのは墮地獄である。それはありがたかるべきをありがたがらぬと同じく、魂の麻痺である。花の散るに無常を觀せず、夕陽雲の觀せゆくに寂心を發せぬ者は俗人である。

宗教はさらに深く無常を觀じ、寂心を喚びさます。

悲しみに對し、孤獨に對し、無常に對し、さらに悲しみに徹し生きることを教ゆるものが宗教である。

悲しみを忘れ、無常を知らず生きることが何でまことの人間的生活であらう。

×

自來圓通寺

幾回經春多

門前千家邑

更不知一人

衣垢手自洗

食盡出城關

曾讀高僧傳

僧可々清貧 (良寛)

これは兒島圓通寺時代の良寛和尚の心境をうかがふによい詩



である。

良寛ほどの人でも寂しさを忘れることはできなかった。

故郷出雲崎を後にして遼々と中國兒島の圓通寺まで出て来て、すでに幾春冬を経たであらうといふ述懐からして感傷を伴ふてゐる。圓通寺の門前には千戸の邑があるが、一人の知る人もないといふ旅の空の頼りなさをあらはしてゐる。出雲崎の舊家橋屋の若旦那として育てられて来た良寛にとつては、自分の衣を自分で洗ふことも苦しかつたであらうが、禪家に入つた以上はそれくらゐのことは何でもあるまいと思ふのが常の人の考へ方であるに、良寛は僞らず衣垢手自洗と弱音を吐いてゐる。食べ物が盡くれば城下を出て托鉢乞食し、寺に歸つては高僧傳を讀んでゐた修行時代の良寛は、今日ありきたりの世間の學生たちとかはりはない。

曾讀高僧傳とあるが、高僧傳を讀むことはわたくしどものやうな在家の者にとつてもなか／＼ありがたいことである。わたくしは寂しさに耐へない時は眠る。眼が覺むれば高僧傳を讀む。良寛和尚に中元歌といふのがある。

母去悠々父亦去。悽愴哀婉何頻々。唯餘二伯叔雙姨母。伯號三妙悟。叔妙眞。妙眞去年五月逝。去歲中元妙悟存。冉々復至中元節。妙悟又作三九原人。去歲去京爲涕泣。今歲又移三江湖濱。居移節換。倍々相思。萍跡暫留南北身。采蘋采蘋

湖之詩。滴淚遠望紀水墳。云々

恐らく諸國放浪時代のものであらうが、去歲去京爲涕泣といふ言葉から見ても、良寛和尚は多感の人であつた。

父の以南といふ人は京の桂川で

「天真佛の仰によりて以南を桂川にすつる」と前書して

染色の山をしるしに立ておけば我なきあといふの昔ぞといふ歌を岸の柳に書き記して、入水したと傳へられてゐる。しかし終に死骸は見えず、高野山に隠れてゐるなどといふ噂もあつたりしたので、良寛は父をさがして京から紀州高野山あたりをさ迷ひ歩いたらしい。つひに父の行方も知れず京を出て近江路にかゝつた時は流石に耐へ切れぬ悲しみに涕泣したのであらう。

京から近江へと居移り季節かはつてますます故人を思ふ心に耐へ得なかつたのであらう。こゝに人間らしい良寛和尚の心のいたましがあつた、尊さがある。

悲しみに敗けてはならぬ。しかし悲しみを忘れてはならぬ。悲しみこそわたくしどもの魂を深くし、淨くする。

今日も終日三光鳥は庭の樺に來鳴く。

新らしい悲しみを掻き立てゝ鳴く。

骨を彫るばかりわびしけれど人は生きて、永劫の寂光を凝視めなければならぬ。



戒律生活

を語る座談會

戒律生活について

浄信尼「何ですか妙なお話のやうで恐縮ですけれど、心の中で、例へば魚なら魚を喰べたいと思つてゐる乍ら、實際にはまあ／＼喰べないでゐるといふのでは、戒法を守つたにならぬものでせうね。どうもそれでは形式だけのやうな氣がしますけれども、實際問題として、ハシリの魚とかシユン時のものとかには、心をひかれることも多いと思ひますけど、どんなものでせうか。」

中村辨康師「戒律といふのは生活上の軌矩ですが、それを生活行爲の上だけに守ると、生活上の心構へとするのでは、相違があります。小乗戒では、形の上だけ守ればそれでよいのですが、大乘戒になりますと、精神主義ですから形式丈ではいけないのです。」

形式主義を衝く

師「まだ私が在家の頃よく伺つた話ですが、一休様が檀家先の御招待を受けられた

時、お料理についてゐた魚を平氣で召上られた。すると同行のお坊さんは豆腐許りを召上つて、さてお歸りになつてから、大層憤慨なされて、一休様を生臭だといつて責められた所、一休様は魚なぞ食べないといふ、いや食べた食べないで、到頭何より證據食べたものを吐出してみよといふことになつて、吐出されて見ると、一休様からは豆腐が出、お連の口から魚が出たといふ話を、伺つたことがあります。やはり精神が貴いので、形に執はれる必要のないことを申したのでせうか。」

中村「譬へ話なのでせうね。つまり、執着を持つことがいけぬのだといふことを言つた話なのでせう。同じやうな話に、かういふ話があります。或る僧が友僧と二人連れで或る川邊へやつて來ると、眉目美しい女性が一入渡るに渡れず困つてゐるのを見た。すると肩に擔まりなさい、負つて渡して上げませうと、背負つて川を渡してやつた。それを見た友僧は、何分女性に觸れることなどは固く禁ぜられてゐる身の上とて、唯ならぬ辭付であ

つたが、こらえ切れなかつたのでせう、櫻邊く距たり去つてから、友なる僧に向つて、先程の態は一體どうしたことか、僧たるものが女性を背負つたりしていいと思つてゐるのかと、なじつたところ、何だ君はまだあの女を背負つて來てゐるのか、と言はれたといふ有名な話があります。今でも錫蘭、シヤム等の佛教徒は戒律については相當やかましいらしい。律藏を讀みますと、小乘戒にあつては五戒八戒十戒二百五十戒等、在家出家の守るべき戒律が細かく嚴重に規定されてゐます。日本でも律僧は、今でも戒を守つてゐますが、一般には形式上の戒律よりも精神さへ確りしてゐればといふことになつて殆んど形式的には無戒律に近くなつてゐます。

一休さんは、かなり奇行騷逸に富んだ人のやうですし、従つて魚を喰べたといふこともあつたかも知れません。たとへ喰べたにしても、もつととした氣持で破戒的な心持は見られなかつたことでもありません。しかし、一方相當深く俳味風流をも解したやうですし、殊に

信仰的には淨土教的な人と言つていいらしく、詩集を見ましても、自分は平凡な一淨土僧だと言つて居られますし、また法然上人に對しては有難や法然活如來と深く歎ぜられてゐます。

今日、お精進料理にお精進乍ら魚や肉の料理の形を作つて饅つてあるのは、どういふものかと思ひます。野山の種々のその儘の風味を味ふ心があつてもよいのでせうのに。いつか滿洲國から喇嘛達の見えた時、池の端の去る支那料理店に案内したことがあります。何分精進料理でなければならぬので、前以て早くから頼み込んで主人に骨折つて作つて貰つたのでしたが、山の芋で鴨の料理に眞似たりといった具合に全部上手に一寸見では分らないやうに作つてありました。つまり、料理人の腕自慢を見て貰はうといふのでせうが、そうなるともう一種の技術になつて了ふ氣がします。

無 戒 名 字

「どうも、喰べたい／＼でゐながら喰べないのでは、喰べるのと同じだとも思ひます。そいふ氣持が無くなるのが大事なのでございませうに。」

中村「今の僧は、無戒名字の僧だと、法然様は仰言つてゐられます。御承知のやうに、法然様は大乗圓頓戒の正統相承者であらせられたし、當時の佛教の習しとして盛にお授戒が行はれたのですから、法然上人もよく戒をお授けになられたものです。しかし、此の頃の一般の傾向は、何も本當に三寶歸依の實を現してゐるのではなく、例へば何々様を信心すると何様が癒るとかといった風な、いはば災難除けや風藥代りにやつたもので、氣になると幾度でも受けるのです。九條公の日記「玉葉」を見ましても、奥方が病氣になられたので法然上人を招聘してお授戒して貰いたくことが見えてゐますが、當時の習慣上貴族社會で左様な場合受戒させないとしたら思ひ遣りなき振舞とされた事でせう。兎に角、お加持などと同じで、厭離・御祈禱みたいな

ものとされたわけです。だから、授戒といふ形式はあつたが、事實は無戒といつてもよい状態だつたのでせう。」

形式も内容を生む

中村「つまり、喰べたい／＼で居るのでなくて、その心持、喰べたいといふ氣が無くなればよいのでせうね。」

中村「勿論、形式よりも心持が大切なのでせう。けれども、またかういふことも考へられます。それは、形式に従ふ中にその心持になれるといふことです。喰べたくても喰べずに居れば、喰べたくなるものです。」

中村「それは、本當にさうですね。確かにさうだと思ひます。」

中村「豊橋の悟眞寺へ入られた山田佛澤さんは、もと魚が大變好きだつたので亡父の所に參られるとよく御馳走したのですが、豊橋へ行かれてからは、何分やかましい所ですからお好きな魚が喰られないので、宅へ來られると新しい魚を御馳走しませうといふの

でしたが、後には御馳走しようとしてもいいと言はれて喰られないやうになりました。」

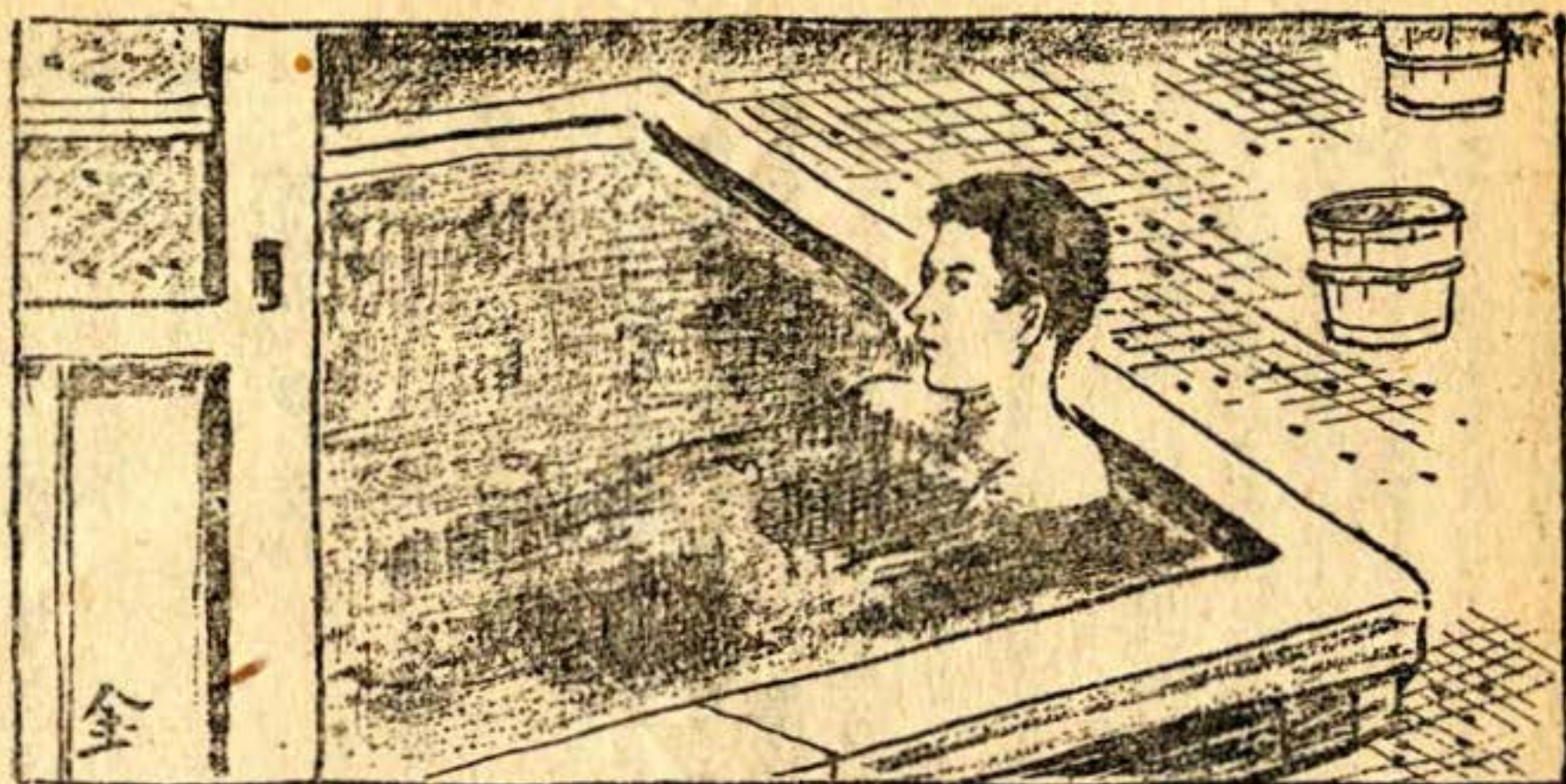
現代佛教と戒律

中村「形に現はれた戒律を論ずるなら、聖遺門の諸宗も今日では殆んど無戒律と言つてよい。今でもそれを守つてゐるものとしては、僅かに律宗、眞言律宗、及び淨土律院僧位のものでせう。先年唐招提寺に參詣した時、紹介狀は持つて參つたのですが生憎住職がお留守で拜觀丈はさせて貰ひたが、歸り際に寫眞丈でも買ひたいと存じて扱ひ所で依頼したのですが丁度係りの僧が無言の行を保たれて居られる時とて幾ら尋ねても何とも言はれぬ、こちらはそうとは氣付かないので覺かしらと思つて益々大聲でやつて見たり手眞似でやつて見たり、どうしても話が通じない。しびれを切らした係僧が危く戒行を破りさうになつたが漸く筆談で用を便ずることが出來、又始めて無言行を修せられてゐることを知つたのでした。兎に角、幾日間か、その間は言葉を

發することはしない。一見、今日の時代には無駄なやうにも思はれますが現代離れした所がまだ残つて居る譯です。さやうな人達の間には幾分か戒律は固く守られてゐます。然し、將して大乘戒が守られてゐるかは、分りかねます。小乘戒は言はば現行犯を問題にするのですけれど、大乘戒は心の持ち方、生き方の上の心構への問題ですから一面から言へば一層その維持は困難とも言へませう。念佛の教は戒律を高く超出して無戒破戒を論ぜず愚昧の者も罪深き者も念佛に依て救ひの白道に入られ、如來の願力に乗ぜられ引かされつつ自づと生活を統一づけ得る教です。」

以上は東京白山上淨き友の會第十六回座談會筆録の一部にて次號に續く。尚ほ

「淨き友の會」第廿二回例會は四月廿三日、第廿三回例會は五月七日開催、舍利弗、目連、迦葉より難陀、阿難陀に至る九大弟子の事蹟について語られた。



説小

殘

雪

一 瀬 直 行

車内にはいつの間にかスチームが通りあた
たかくなつた。

上野驛をたつ時は花見客が構内にあふれ、
櫻の見頃もこの次ぎの日曜が峠とされてゐ
た。人込みにもまれたむし暑い汗ばみが、ま
た皮膚から消えぬやうに思つてゐたが、上越
線廻り新潟行に四時間もゆられてゐるうち窓
の隙間風は冷たく流れ込み、山麓の木の間に
は残雪を見た。山間を縫つてのぼつて行く汽
車はのろく、一驛ごとに車内はあたままつて
いった。

もう一度雪山を見たい。雪のとけた水を掌
にすくひ、澄んだ冷たさを口にして齒ぐきに
しみる清らかさと共にそれを呑みほしたい。

遠く雪をいたゞく峯々の間から晴れた青空を
眺めたい。残雪を取りのぞき一多日に隠れた
地肌の冷たさ美しさに頬を觸れたい。さう思
ひたつと子供が我慢しきれぬやうに上野驛に
かけつけ十二時半の汽車にとび乗つた。

高崎まで来ると新潟行と小山行の二つに分
れた。澁川を過ぎ後開を過ぎ、やつと水上を
発車した。東京からの湯客はそれ／＼の驛に
降りていった。雪國にくらす赤黒く雪やけの
した乗客だけがあとに残つた。尙小一時間程
かりしてゆられてゐなければ目的の山麓の湯
にはつかかなかつた。

急な上りにかゝつた汽車はのろく、いゝ加
減あきた窓に頭をもたせかけ、次ぎ／＼と變

つてゆく山のたち姿に眺め入つてゐたら、これは又意外な花嫁姿と四十がらみのつれの女が靜かに乗つて來た。どこに席をとらうかと一瞬とまどつてゐた。俄かの客人を迎へ興味かた／＼見てゐたら、これは又、向ひの空席を見つけ腰をかけた。そこは車のとぼつ口で洗面所と隣り合はせてゐた。

の方に視線をそゝぎ、やがて思ひだしたやうに聲を合はせうたひだしたが、もう前のやうに調子は合はずちくさくになつてしまつた。それと背中合はせの席には、地方の驛から驛を渡り歩く行商人が三人、自分の膝に荷を挟み、とき／＼云ひ合はしたやうに横眼を使つては卑しい笑ひを浮かべてゐた。

の人々が、走り行く車窓に向つて手を振り口々に何やら叫んでゐた。一同の足元には雪がつもつてゐ、もんべい姿を雪に埋めてゐた。背景の樺木の雜木林がつゞき、行手の方角に當り山頂が遠く近く重り合ひ聳え立つてゐた。

狭い所に向き合つた花嫁の顔を観くのは、先方よりこつちの方が氣まづく、出来るだけ視線をよけ、それとなく相手の落着かぬ氣ぶりを感じてゐた。直ぐ後の席ではこの地方の上級の女學生達が車のすゝた座席へ宿題の裁縫をひろげ、針を動かしては鋏を使つてゐたが、こゝんだまゝの彼女達は代りはんこに頭だけを上げて、花嫁姿をチラツと盗見しては小聲で互にさゝやき合ひ、しのび笑ひをもらしてゐた。若い彼女達の眼にはたゞむづ痒くうつるのであらう。それと向き合つた向う窓の席にも、同じ學校の女生徒達が、いまの今まで健康な歌をたからかにうたつてゐたが、びたりつと止めたかと思ふと、一せいに花嫁

さう云ふ乗客にとりかこまれた花嫁は、さぞしはにかんでゐるであらうとみれば、うつ向き加減につゞましく膝を揃へてゐるが、思つたよりしやんとして周圍に恥ぢらつてはゐなかつた。やがて汽車は隧道にかゝつたと、急に彼女はもち／＼し始めた。急に明るくなつた窓には山一つ越えたゞけですつと雪は深くなつた。闇になれた眼に雪の照りかへしが刺すやうに痛かつた。やがて向ひの花嫁は腰を浮かせ、急いで窓を開けようとしたが、普段着つけぬ衣裝に一瞬ためらつてゐたので、代つて窓を開けてやつた。とみれば、隧道を出て間もなく山道の向う側一段と高くなつた丘には、一列に並んだ土地

窓から顔をだしたくも風にさまたげられるもどかしさをもつて、小さな聲で早口に喋り、強く片手を振り上げては遠く過ぎ去る一同に彼女は答へてゐた。たつしやでくらせ、母さんを大切にしろ、仲よく心を合はせて働いてくれと、多分さう云ふ平凡な日常のことを云ふつもりであらうが、最後となつて云ひたくも一どきに云ひつくせぬ苛立ちを彼女は露骨に現はしてゐた。一樣に集つた多くの視線に遠慮會釋のない彼女のその時の態度は美事に、たゞたのもしかつた。

丘の一番端にゐた女の子は恐らく彼女の妹、それと並んだ男の子二人は恐らく直ぐの弟、そして左端に杖を持つてゐたのが母親か。後に立つてゐた親爺は親戚筋か近所の

者であらう。この汽車を見送るためにわざわざ山を下りて来た一家に相違はない。眼元の細いところ顔から兩頬にかけふつくらししたところ一目見て一家の人達であることがわかった。窓邊から手のとどきさうな山徑の丘に彼等は立つてゐ、ほんの間の出来ごとであつた。いづれにしても彼女の家を去ることは何かにつけあと／＼困る一家とみた。刻々遠ざかり小さく消えてゆく彼等の姿に名残惜しさうに見送つてゐた。やがて彼女は元の席に腰を下し、見るともなく見れば鼻の下に黒いものをぶらさげ、ごみかと思れば鼻くそらしい。思はず健康な笑ひが胸もとまでこみ上げて來たが、ちつと抑へ元のやうに窓を閉めてやつた。膝の上に置く片手には扇子を持ち、手の甲には白粉の氣がなく、太い指と纖よつたよこれと、短くきつた爪にはまだ畑の土が残つてゐた。この土を抱へたまゝ縁さきの家の土に又よこれてゆくのであらう。健康な兩肩に強くもり上り胸元がゆつたりして首筋が太かつた。野育ちの花嫁。流石に顔だけは白粉を塗

つて化粧をしてゐたが、小鼻のまわりから口元にはげおちてしまひ、家を出る時には恐らく塗つてゐた口紅も汚くおちてゐた。上唇があつく眉毛は濃く、その時、ふと彼女の眼元に一滴の涙を見た。慌てゝつまらぬ詮索を恥ぢ窓外に視線を外した。あの中には丘の上の一家の姿がこもつてゐるのか、それともこれから先き穢くくらしの先き／＼の涙か。山一つを越え、たゞそれだけの懐しい娘時代との別れにたゞ悲しむとは何故か見うけられなかつた。

一度にとけ出した雪水に溪流は水かさをぐつと増してゐた。それに沿ふて走る汽車は更にのぼりにかゝり一段と速力をおとしてゐた。せつかくの雪山の肌がスキーに荒らされ醜く汚れてゐた。

汽笛の尾を長くひき長い隧道に滑り込んだ。外の眞黒な闇が窓硝子の裏にはりつきその中にくつきりと化粧の横顔がうつゝた。はすつかいになつたまゝ暫らく眺めてゐた。直ぐ隣に小さな膝を抱へ、今日のはれの媒介人

をつとめる遠い身内に當るらしい女は、小聲で色々彼女に話かけてゐた。

主に彼女のゐなくなつたあとの一家のくらしについて語つてゐた。戦地の兄に知らせたおいたが、返事をまたないで嫁ぐつらさを訴へてもゐた。さう云ふ生活のありの姿を耳に挟み、窓の鏡にうつる彼女の横顔をみれば胸の自然とあつくなるのをおぼえる。どこかに氣丈夫さのうかゞへるのははたの眼にたのもしかつた。兄の出征中は兄に代つて彼女が立ち働いてゐたらしく、兄の許しを待たずに嫁ぐのにも何か事情があらう。残してゆく弟妹のことをしきりと心配してゐた。年も二十三四か、どことなく落着きがあつた。隧道を出ると更に山は迫つて來た。いくら語つても語りつくせない二人の様子であつた。

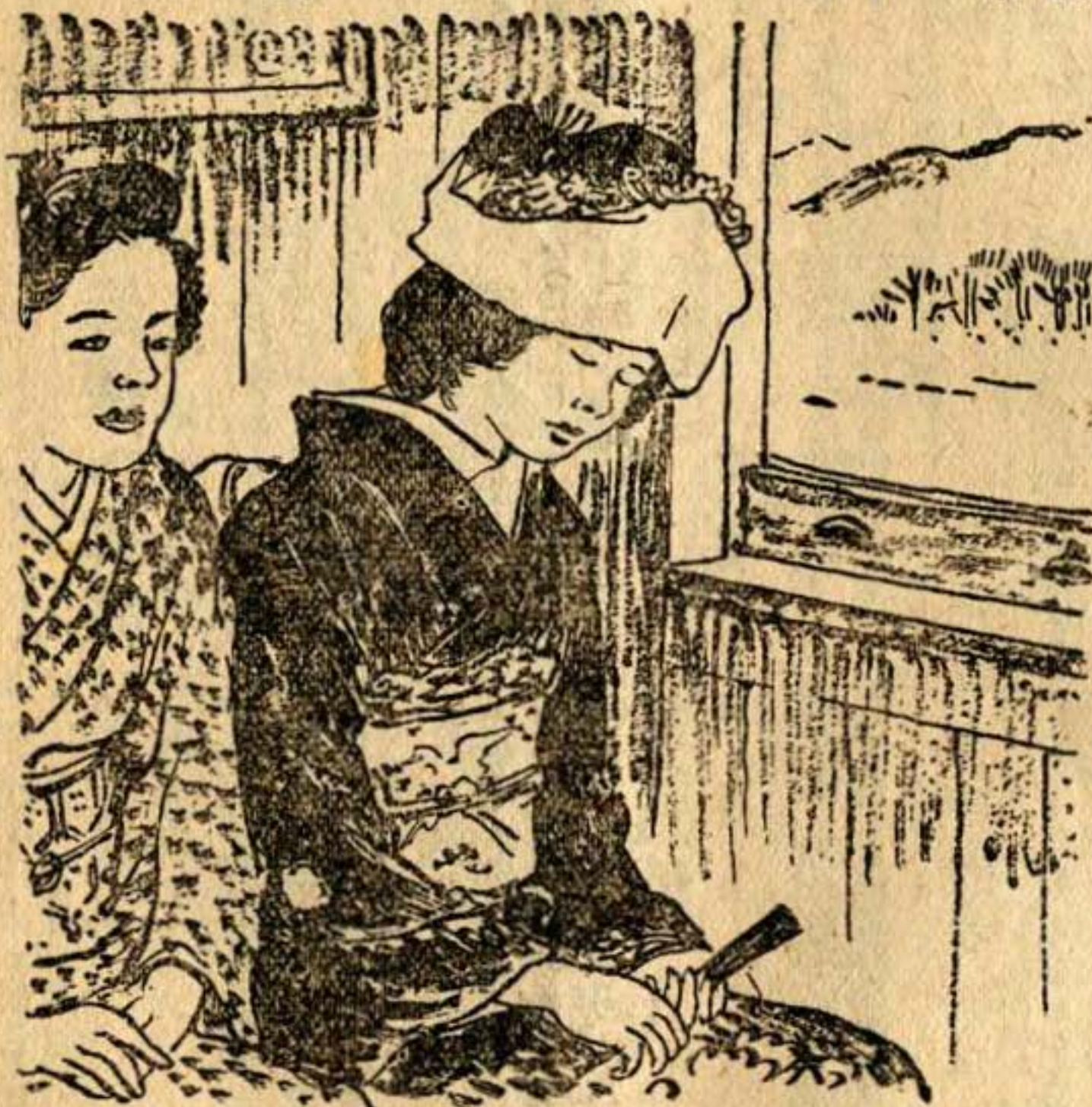
よく聞きとれないが、時々話の中に男の名が出るのは恐らくこれから嫁ぐ先きの相手であらう。それにしても話の具合からまだ一度も相手に會つてゐないこと、まして相手にどつ云ふ氣持をもつて嫁ぐか、まことにあやぶ

まれた。相手の一家のくらしについて話がある。急ぎに仲人らしい口ぶりをもつて語り、田舎言葉はいつ果てるともなく續いた。想像した通りいづれも農家の人たちであつた。

膝の上に置いた圓味のあるつまましい手には一本の黒塗りの扇子が握られてゐた。使ひ古した塗りのはげ長い紐は垢に汚れてゐた。粗末な裾模様の着つけはくすれ白地の襦袢の襟は汚れてゐた。角かくしの端がピンでとめてあつた。赤毛のまじつた髪かたちはもうづれてゐた。隣の女は思ひ出しやうに急に立つて前から覗くと、彼女の襟元をつくりひ、髪をなでつけてゐた。その時汽車は次ぎの間近を走つてゐた。

窓硝子に水玉が突然當つて散つ

た水玉はつゞいてはちけとんだ。山を越えたから急に空模様が変わり快雨が降つて來た。



やがて一段と速力はおちごとりと云ふ鈍い音と共に車は驛の構内に滑り込んだ。山間

は見當らない。花嫁は立ち上つた。つゞいてつれの女も立ち上り、忘れ物はないかと一度

席を見返り急いで立ち去つた。

やがて直ぐ窓下には下り立つた二人の姿が現はれた。つれの女は手をかざして降つて來た雨に慌て、一瞬どうしようかとためらつてゐた。とみると、急に花嫁は意を決したやうに尻をまくると後車の方へ一さんにかけ出した。つれもそのあとを追つた。やつとそこで朝夕の姿にたちかへつて走る彼女の姿に見送る方も何となく氣が無く、まことにあたりになさしい明るい眺めであつた。汽車は再び動きだした。それまで聲をしないでゐた女學生の一面は急にはしやぎだし消えた花嫁姿に話はずんだ。はす向ひの行商人達は一層猥褻な話に興じ合つた。山の雪の迫る車窓にすつかり彼等は花嫁の残り香にかき亂されて

の小驛で人影とてなく驛の直ぐ後手に險阻な山の裾がのびてゐた。窓から人家らしいもの

しまつたらしい。山間の小驛に花嫁だけをおとした汽車は一段と速力を加へていつた。

——その夜、山の宿に一ねむりして窓邊の

風に、ふと眼がさめそ

のまゝ床を抜け出す

と、宿の長い廊下を幾

度も曲り、はづれの浴

室にとび込んだ。寢静

まつた宿の玄關の柱時

計は午前一時を打つて

ゐた。中庭の池には雪

が積り窓の外に小高く

闇に白く浮いてゐた。

山からひいた湯は樋

の先きから浴槽に流れ

おち、狭い天井に湯氣

はたちこめてゐた。物

音一つこゝまでは聞え

て来ない。かうした深夜たゞ一人山の湯にひ

たり、勝手な思ひにふける樂しさは別であつ

た。窓外で木立をゆする風の音、サラ／＼と

山風に舞ふ粉雪、かへつてゐたりの静けさを

増した。手足をながながと湯の底にのぼし、

湯ぶねのふちに頭をもたせかけ、ふと思ひだ

それこそ雪山の深い深い自然の地肌からとび

出したやうな輝きを身

一ぱいに迎へさせた

い。裸のまゝの若い男

と女のまことの喜びを

迎へさせたい。

浴槽から手をのぼし

湯氣にくもつた窓硝子

に、今日の日づけ四月

八日、そして午前一時

と書いた。指先きの文

字を通して外に深夜の

山の雪を見た。雪の影

の闇にきれるあたりに

細い溪流が走つてゐる

のか、初めてその時さ

すのは、今頃車中の花嫁はどうしてゐるであ

らう。多分草葦屋根のくすぶつた部屋に酒も

讀者の皆様へ御願ひ

誌代値上げに就て——

本會が讀者の皆様への御高庇に依つて健實の歩みを續け既に滿四年以上経過し得ました事を厚く御禮申し上げます。御承知のやうに當初に於てすら、非常の努力で特に編輯や事務などにたづさはるものは殆んど奉仕的な熱意を以て奮勵し「誌代」も他では到底見ることの出来な

い程の廉價を以て御禮ひして來たのであります。ところが支那事變勃發以來、數度に亘つて紙價并に印刷費が高騰したのみならず、郵便規

一ヶ年誌代

金壹圓貳拾錢

金拾貳錢

就きましては今まで御納入下さつた誌代の内、七月號からは一月金拾錢の割で計算させて頂きますから、何卒不惡御諒承御願ひ申し上げます。何うぞ今までの苦心に御同情下さいま

昭和十四年六月

法然上人鐵印會

りは終つた。さうして初めて迎へる驚きの一

だことは、今までにないと思つた。

俳壇

大田 耳動子



東京市 三野 輪幸留

霞パンをかちりてをれば雲雀なく

評—昔の畫家は既して形式にとらはれ、

腕で繪を畫いてゐた爲めに、表現に片

寄り過ぎて實相に遠い憾があり、今の

畫家は既して頭で繪を畫いてゐる爲め

にトゲ／＼しい憾がある。そして此の

事は文學の傾向をも物語つてゐるやう

だ。一段の進歩ではあるが之を更に腹

で仕事をするとところまで進めて行きた

いものである。勿論容易なことではな

いが。

吾が俳句も文學の中で一番進歩が速

く、今だに心にもない事を表現にのみ

頼つてゐる人が多いやうであるが、最

早其の時代ではない。もつと實相を極

める爲めに、物をよく見詰めてほしい。

トロツコの人に手をふる茶摘つ子

評—「茶摘」と云ふことを想像してゐる

と誠に風流で上品なものと思はれる

が、實際には此の句のやうな場合も有

るに違ひない。それを取り上げて呉れ

ると見ゆるところがあるが、それは反

つて内容を正確に傳へるに役立つてゐ

る。

高岡市 内山 添水

歸還兵と刷りし名刺や花ちかし

評—作者自身が歸還兵なのか、或は歸還

兵を詠つたものか、其れは判然としな

いやうであるが、前後の關係から作者

自身と解したい。

「花ちかし」と云ふことから歸還兵の

歡喜と希望に満ちみちてゐる様子が、

あり／＼と刷はれる。

釜山 水田 菊太郎

夏足袋の廊下に寫り歩みくる

アドバルン眞直に浮くも春の空

雪ひさしつら／＼曲れる草家かな

どの部屋もあやめ活けたり初夏の宿

千歳 森田 法男

青々とむらがり生えぬ葛蒲の芽

富山 藤田 四三句

蛙鳴く聲を聞きつゝ不動尊

石川 小笠原 遼草

波の音せまる夕の花御堂

廣島市 小宮 邦香

燈の灯にいとけなき日の返りける

朝 無 雪江 八年坊

だんだらの畠も遠く麥青し

京都市 鈴木 白舟

花の風山鳩書を啼き續く

三重 今村 田登子

火蛾きたり習ふ少女の瞳にちらと

廣瀬市 小宮 盛平

白木遊夢の如くに咲きゐたり

中文 渡道 宮林 春雄

衛兵の耳を衝き来る蛙かな

東京 雅 恵

鷺の木魚の音に順れゐたり

京都市 福島 孝治郎

近江路やタンボボねぶる牛黒く

小樽 平井 善慈

雪融の龍としもなくこゝかしこ

姫路市 内海 一香

鹽かに淡路へ通ふ船の音

前橋市 瀧 全翁

うち敷ける木葉を掃けば菫かな

京都 小林 常人

日の丸の扇はなやぐ御輿かな

東京 久保 金波

冷灰の炭火わびしや春の晝

栃木 大輪 云海

猫の目に電燈光り春暮るゝ

山口 長岡 見智

樂書の争ひとなり柿若葉

大阪 別府 規子

起重機のうごき重たき暑さかな

大坂 清水 明定

淡路島今日も霞にとどされて

京都市 伊 奈 李

英靈を小鳥もむかへ春の村

祖母の肩たゞく日の縁のどかなる

滋賀 重野 ふみ子

水打つて若葉の香通ひけり

投稿規定

官製はがきに一四二句以内

とし「淨土」編輯部併係

あて送ること

大阪 正月 正金

大坂 清水 明定

京都市 伊 奈 李

英靈を小鳥もむかへ春の村

祖母の肩たゞく日の縁のどかなる

滋賀 重野 ふみ子

水打つて若葉の香通ひけり

投稿規定

官製はがきに一四二句以内

とし「淨土」編輯部併係

あて送ること



今年の花祭り

相馬 黒 光

始めて花祭りを行つたのは昭和三年でし
た。爾來十二年の間、毎年四月一日から降誕
佛を店におうつし申上げ、自分で考案した供
物や、印度の風習等を取り入れた捧げ物を
奉りお祭りをあげて來ました。

降誕佛は、佛教藝術者として名ある大内青
圃氏の作になり、故渡邊海旭師導師となり、
最も莊嚴に開眼して頂いたもので、殊に思ひ
出深い佛であります。

始めは、無關心にその前を通り過ぎる人ば
かりで何の反響もありませんでした。

けれども二三年前から、花御堂の降誕佛の
前に立ち止まり、恭しく合掌したり、備へ
てあるお香を献ずる方がボツ／＼見かける様

になり、心ひそかに、どんなに嬉しくも亦有
難く思つたこととせう。

然し今年は、事變のために種々の統制が出
來たり、材料が手に入らなくなつたりして、
従前通りのお供物を全部揃へることが出來ず
心ならずも不足のまゝでお祭りをしたのは、
心苦しいことでした。

ところが、それにも拘らず、降誕佛を禮拜
する方が意外にも激増し、それと共にいつの
間にかお賽銭を上げて行く方がありまして、
總計一圓四十六錢也を計上されたのには驚き
ました。(寫眞は中村屋の降誕佛)

佛の店員が、それを袋に入れて私に示し、
「どうしたらいいでせう」といふのです。私

花と討伐

人見部隊 安田 秀賢

空には無數の星がチカチカと光る。そし
てこの静かな行軍中で兵器のカチ鳴る音が
時々兵隊の肩のあたりにすると、小さな聲
で「静かに静かに」と列の中にする。岩石
だらけの急坂をのぼり、イバラの中を踏み
分けて午前六時頃に漸く〇〇山麓に到着。
敵は未だ我軍の迂回を氣付かぬらしい。

スット前方をすかして見ると赤いツ、ジ
の花が點々と咲いてゐる。やがてこの花の
色のやうな戦斗が初まるのだが、私は草の
上にホット腰を下ろして空の星を見た。今
年四月初入學する子供の顔がチラツと頭
の中をかすめて行く。

拂曉戦は午前九時頃になつて敵の銃聲が
小さくなつて、それが十一時頃になると大
水の引くやうにこの山岳地一帯が元の静寂
さに返つた。眞紅のツ、ジの花は小松や草
むらの間に點々と燃えあがるやうな色に咲



極樂いろは歌(二)

沙門西念作

にはかにも行ひ立つと徒ならじ只極樂の事を思ふに

ほどもなく夜晝見るに飽かぬかな寝ても覺めても釋迦彌陀の顔

經しとさは徒なる露の萬代を此身を捨てゝ法をこそ思へ

(これは野山の沙門西念が作った極樂願住生願、四十八願になぞらへて、四十八首となる願を追つて掲載します。)

は黙つてその袋を受取り押敷き、それから合掌いたしました。渡すもの、受けとるものの眼には感謝の涙が光つてゐました。

之こそ眞の淨財でした。定めし戰歿將士の肉親やご縁のある方々の涙の結晶でありませう。私は御淨財を御社に托して何かの一端に加へていたゞき、皆様の御芳志を生かして上げたいと思ひます。

(相馬黒光女史は以上のようにお賽錢の由來を記して一圓四十六錢の外に金五圓也を添へて本會に託されましたので、本會では右淨財を傷病兵慰問淨土の寄附金の中に繰入れました。)

いてゐる。この戦斗の犠牲となつて散華せし中村上等兵を山上から擔架で漸く下ろし山麓の藪の所まで来て、分隊員一同で告別の讀經をした。

僧侶としては私唯一人で靜かに三誓偈に願弟子等の文を朗々と誦す。この讀經の和聲は折からの山の風に吹かれて故里の母と妹の耳に流れて行くかのやう。上海戰以來の中村上等兵の郷里には年老られし一人の母が夜更くる針仕事に念を入れ乍ら我が子の武運を祈つておられたらうに。又一人の妹は村の岡に立つて遠く中支の空を見て我が兄の武勳に光る頬を思ひ浮べておられたらう。大休止の後、全般の用意が整へられて、やがて一陣の煙がスルスルと山上へのぼつてゆく。

それは中村上等兵の無ろな火葬の煙だ。これをとるべく分隊員の顔は悲愴の極に達し、一筋の涙が誰もの頬を傳ふ。明日を知れぬ我々兵隊の生命を自身に見つめて、やがてその煙がゆるくなる頃、夕風がしみじみと身にしみた。



(筆 隨)

念 佛 三 想

金 田 明 進

荷がすすくと目に見えてのびてゐる。新緑に午後の陽がまばゆく照り映えて美しい。こゝ田舎寺の庭は、いまのどかな初夏の氣にみたされてゐる。靜かに思ひ出づるまゝを念佛の友に語る心地で筆を執らせて置く。

年寄の念佛

いつも私は、緑の春の天地をみつめて、お念佛も、こんなに潑刺と芽を吹き出すやうに申さ

れねばならないと感ずる。明るい生き生きしたお念佛をさせて頂きたいものだ。この土地へ住して五年経つたが、心から共に毎日念佛申させて頂く友がたつた一人しか居ない。すまないことだ。だが、その一人が尊い一人だ。深いお念佛を味つてくれる人だ。日々念佛で自分をほり下げてゐる人だ。

念佛はこの地方にも習慣的には存在してゐるが、やつぱり一つの風俗としての形にすぎない。生き生きした所がない。先日、映畫「土」を見た、あれはこの土地の風俗をえがいたものだから、特に見たい氣になつて見た。あの中で念佛堂の年寄念佛のところが出てくるが、たしかにこの地方のすがたを現はしてゐる。しかしどつかに非現代的な、民俗的遺産といったやうな低い宗教習慣を見せつけ

られたといふ感じを抑へることが出来ない。阿彌陀佛の御前に大ぜいの年寄りが集つて、鐘と太鼓で、獨特な調子のお念佛をする。あの中には年寄の慰安があつても、人生の希望と生氣とは見られない。

しかし、年寄念佛でも、慰安念佛でも、遺傳的念佛でも、それは尊い力をひそめてゐるものだ。

少しまへ、隣り村の〇〇院といふ名のみのお寺へ行つた。名のみのお寺といふのは、實は今村の集會所になつてゐる所である。建物も佛堂といふ感じは少しもない、しかし、昔から年寄の念佛場所であつて、今日でも年寄の間では楽しい慰安所である。そして室の一隅には立派な

阿彌陀佛像がまつてあり、その上には〇〇院の寺號が額に明記されてある。

ところで、こんどこの寺號を關西の某地方の教會所へ移轉して、立派な寺院にすることに關係者間で話がきまつた。

そこである日關係者として私たちがその村の念佛年寄がこの場所に集つた。年寄たちは私等

に向つて最後に口重く云ふのであつた。「こゝは寺號は名だけであつて、どこへもつていつてもらつてもよいが、私たちはこの阿彌陀さまとどうしてもお別れしたくない、何とか方法はな

いでせうか」と。私はそれをきいて涙がこぼれた。

はなかつた。年寄たちの念佛は若いものから見ると、生氣がた

いとか、希望がないとか、慰安にすぎないと云ふが、その念佛は寺といふ建物の手前申すのではない、そこで待遇されるから申すでもない。希望や利益を求めて申すでもない。たゞみ佛を頼みきつて申すのであつた。

佛さまと別れたくない！のだ、理屈でも手段でも希望でもない、たとひ、それが習慣的であつても、佛さまを頼む念佛だつたのだ。

私はこの時ほど年寄の念佛の中にハッキリ尊いものを認めたことはなかつた。

「いゝですとも、いゝですとも。佛さまはお残り置いてよい

のです。みなさんの阿彌陀さまとして永くこゝでもおまもりしてお念佛を申して下さい。たゞ〇〇院の名まへだけを關西へい

たゞければよいのです」
こう云つたら、この日、佛さまとお別れの念佛をするつもりで集つた年寄たちが、意外のこ

とに泣いてよろこんだのである。

年寄仲間では順番でお百萬遍のお宿をひきうけて、にぎやかに年寄念佛をやつたのを幼な心に覚えてゐる。しかしこの祖母の念佛がその後いくばくもなくこの祖母と兩親とを失つた八歳の私の上に救ひのお力となつて現はれ、その毘沙門さまのお寺に入

門して出家の道に旅出したのであつた。法然さまを通して阿彌陀

くともよい、特に希望を求めなくともよい、お念佛のその中には自らなる尊いお力があるのだ、たゞ信じて申すお念佛には老人の念佛も若人の念佛も距てがないのだ。

軍國の母

私の寺の門前から少し離れた所に、小きれいな煙草屋さんがある、そこにはいつも五十を越えた年頃の小母さんが店にひとり坐つてゐる。この小母さんこそ、田口こうさんといつて去る四月二十四日、靖國神社の臨時大祭を期して、厚生省軍人援護部より全國の支那事變に護國の華と散つた軍人遺族にその激勵のため編輯し配布された「軍國の母の姿」なる小冊子の第一に

選び掲げられた模範の遺族の主八公である。

この小母さんの夫定次郎さんが日露戰役に松嶺山の會戰で護國の華と散つた後、小母さんはうら若い身に固い覺悟を抱いて一子富五郎さんと五人の家族を支へて苦闘の生活に乗り出し、三十有餘年、夫の弟妹にはそれぞれ立派に道を興へ、夫の忘れ形見の一子富五郎さんは中學へ通はせ、更に中等教員の資格を獲得させ、今では群馬縣のある縣立蠶絲學校の次席をつとめるまでに育て上げたのであるが、その苦闘の生活記録は軍國の母の尊き姿として全國に紹介されたのである。

あとを語りもせず、三日と缺かさず夫君のお墓に花を供へてお詣りをする小母さんであることに、どこか氣高い氣品を感じるばかりであつた。その夫君のお墓は私の寺の山門をくゞつてすぐ左側に建てられてあるが、いつ誰が參つて見ても、通り過ぎても見ても、冬でも夏でも生々した花が上つてゐないことはなかつた。三十五年もの間、女腕一つで、印紙をうり、賃仕事をやり、遺子を一人前にそだて、家族を養ひ、經濟苦に追はれ、商賈仇にあだされ、その苦闘はきく者をして泣かせせずには置かないが、そんなことを何一つ知らずとも聞かずとも、この夫君のお墓にお詣りする者には、この小母さんの絶えざる尊い奮闘

と英靈に對する無上の貞節とを感ぜずにはゐないのである。いつも微笑をうかべて寺の參道をひとり黙々と墓詣りしてゐるこの小母さん。三十五年間一日のごとく、これをつゞけて來た田口こうさん、その姿には誰一人敬意をささげぬ者はない。やさしき、墓前念佛の姿の中に一切の努力がひめられてあつた、そこに強き軍國の母の決意がひめられてあつた。切り髪のおこうさん！ その念佛の一聲一聲には、み佛の強きみ救ひを受けて、多難の軍國の母の道を眞直に力強く歩みつけて來たのであつた。けふもその墓前には牡丹とチユーリップが麗かな境内の初夏の陽をあびて英靈のほゝえみを

うつすがごとく、うるはしく供へられてゐるのである。

念佛で悪くなる

「お念佛させて頂いてゐると益々自分が悪くなりますね、どうしてこう私は悪人なんですか——」と。これは毎朝お念佛に來る岡部さんのこのごろの述懐である。

念佛を申すと悪くなる！

妙なことだ！

だがやつぱり悪くなるのが本當である。念佛を申さぬと悪い自分が、氣付かずにゐるのだ。自惚れてゐるのだ、かひかぶつてゐるのだ。念佛すると自分のありのままの姿がハッキリ見えてくるのだ。申せば申すほど悪さがハッキリしてくるのだ。申

譯ない、すまない、さんげの氣持ちが湧然と出てくるのだ。

岡部さんは益々悪くなる自分を感じながら日一日とそのお念佛が眞剣になつてくるのである。昔は岡部さんはお店が忙しくて手が足りなかつたり、店の人々が思ふやうに働かぬと腹を立てたり、クヨクヨしたものだ。今では若い店員も居なくなり、やつと片腕となつて働き出した長男興助君が入営したり、手は益々なくなつて來ても、一寸もあせらず、素直に商賣をやつてゐられる。他の人々は忙しくて寺へ行く暇がないといふのに、忙しくなればなるほど、朝も早くから高聲の念佛を稱へに二丁餘もある寺へ缺かさず詣られる念佛なくしては生活が出來ぬと云はれる。

そして益々悪くなつてゆく自分を一層念佛で鍛へてゐられる。忙しくて夜もやすめぬと云ひ乍ら、淨き友の會へも上京する。中村先生の御講話にも橋本女史のところまで出かけてゆく。

どんなに人手がなくなつても、どんなに商賣が忙しくなつても、岡部さんはこのごろは少しも愚痴を云はれない。大きな荷物を自轉車につんで走つてゆく、その岡部さんの口元はいつも動いてゐる。岡部さんはお念佛で商賣を配達してゐられるのだ。忙しくなるほど眞剣なお念佛が深まつてくるのだ。だから岡部さんは一層自分が悪くなると云はれるのだ。けれど岡部さん

んは御法語の「わが身わろしとても疑ふべからず」を確と信じて念佛されてゐるのだ。

岡部さんこそは私のたつた一人の毎日の念佛の友である。

(一四、五、七)

極樂いろは歌(一)

沙門西念作

いろ／＼の花を摘みては西方の彌陀に供へて露の身を悔ひ
ろく／＼に廻り遇ふとも法の道絶で行へ釋迦のこのころ
(ろく／＼は六賊の誤りか)

はかなしや此世の事を急ぐとて御法の道を知らぬ我身は



善惡の彼岸

(續稿)

佐藤 賢 順

これまでの話の経過を引續ぐやうに、〇夫人はかう言ふのである。

「私の宅には三人の子供がありまして、皆惡戯盛んですが、その躰方につきまして、どうしたらよいのか全く困つてしまふことがあります。と申しますのは、親としてはかうしてやれば善いと信じてやつたことが、餘り考へすぎてやつた爲でせうか、子供にとつては、結果に於いて、大變迷惑であることが折々あります。子供の身體を勞り過ぎて、風邪でも惹かしてはいけなと思つて、厚着をさせて置く習慣が、却つて子供を虛弱にしまふとか、食べ物でも、餘り氣をつけ過ぎるために却つて偏食の癖をつけてしまふとか。自分が善いと信じてやつたことでも、その結果が善くなかつたやうな時には、悪いことをしたやうな氣がして濟まなく思ひます。親と子との間ですから、かうしてやれば一番善いと考へてすることは眞剣です。決して、

義理一遍や世間の習慣に従つて、その場限りのお座なりの心持でやるのではない筈ですが、それが結果としては悪かつたとなると、どうしたらよいのか全く當惑してしまひます。」

D氏がその後を受けて早口に喋り出した——

「それは全く深刻な悩みですね。然し如何なる場合でも自分の善いと信じたことを爲るより外に仕方がないでせう。結果としては善くない。とになる場合があつても、人間にはそれまでは解らない。自分で色々考へてみて、これで正しいと信じたら敢行するより外に道はないでせう。さうでなければ、何も出来なくなる。」

これは一つの考へ方であつて、而も道徳上最も重要な考へ方の一つになつてゐる。

D氏は言葉を續けて次のやうに言ふのである。——
「さういふことは他人ばかりの世間へ出ると、毎日のやうに痛



明に考へさせられるのです。自分がこれ 正しい、かうしなければならないと信じて行ふことが、他人に對してもこちらの思つた通りの善い結果になつて来る時はよいのです。他人も喜び自分も喜ぶ。けれど、さう直ぐには思ひ通りの驗が現れなかつたり、場合によつては案外な結果さへ現れたりすることがある。全く世の中といふものは、どういふ所からどういふ働きが加はつてくるか解らないものですから、いくら自分の動機が善い動機であつても、その力通りにはならない。ですから、全豫想外の惡結果に終ることさへあるのですが、そんな時には、自分の心持は決して他人に通ずるものではなく、他人から非道く恨みを受けるといふことも珍らしくありません。それでも私は顧みて自分が正しければ更に悔いるところはないと思ふのです。」

と強い處世上の信念を披瀝した。

これは確かに尊敬すべき道德的規準であつて、これ以外に道德上の準則を求めるならば、「最も多くの人に最も大きい幸福を齎らすもの」といふやうな、明瞭の如くであつて甚だ曖昧な、浮動し易い標準に依るより他はないであらう。

D氏の語るのを、一種崇高な感じを以つて聴き乍ら、私はカントが「世界の中には、いや世界の外にも、善なる意志以外には制限なしに善と考へられるものは、どこにもない」と言つた

のを思ひ出した。カントによれば善の行爲を實現する道德法は、善なる意志によつてのみ規定されるとせられた。カントの考へはD氏の考への線を経長して、これを學問的に論理的に組織づけたものと言へよう。私も時は時折この類型の道德觀に出遭ふのである。

× × ×

然しもう一度考へ直してみよう。〇夫人の語るやうな、一度温い慈愛の懷を通して、熱意を重ね思案を凝して爲される親の子に對する心使ひは、たとへ豫期した程の効果が得られなくとも顧みて更に悔いる所ないかも知れない。いや、それだと決して悔いなしとは言へないであらうが、その動機の純粹さは保證されるであらう。

だが、それが全くの他人との關係となつて、道德的關係が明らかに意識されてくるやうな場合になると、なかなかD氏の言ふやうにはいかないのである。親の子に對する關係を道德的關係と言ふのには、私は些か躊躇する。それはもつと高いものである。他人に對する行爲の動機には思惑や打算や利害關係や、その他、程度の高い低いの區別はあるけれども、何等かの人間的なはからひが加はつて来る。行爲する當人としては、全く純粹に正しい動機からだと思つて深く信じてゐる時でも、たとへ無意識にはあらうと、何か主我的なもの、身勝手なものが混入して



ゐないとは誰が言へよう。自ら善いと信じたことでも、仔細に分析してみれば、其の動機には様々な不純な要素が混在してゐる。こゝに人間的な善の限界がある。人間的なものはからひの行きつまりがある。

カントは理論上これを抽象化して「純粹意志」などといふ言葉を使つて、出来るだけさういふ自分本位の、何か結果を目當の動機を取除かうとしたが、それは單なる理論上の抽象化に過ぎないことは言ふまでもないことで、さういふ行爲は現實の人間としては出来ない相談である。

善と惡とは、今言ふやうな一二の標準によつたり、普通に世間で習慣上、善いとか惡いとかいふ通念によつたりして、道德的には一應は區別することが出来る。そしてその區別は處世上は誠に大切なものであることはこゝに言ふまでもないけれども、嚴密に言へば、一體何が善であり何が惡であるかは、容易くは定め難いと言はなければならぬ。

私はその席に居た人々に、かやうな意味のことをお話しして、次のやうに附け加へた。

「道德的な立場は、人と人との間に成り立つ相對的な關係だけをしか見ないけれども、宗教的な立場は、人と人以上のもの——それを絶對者と言つても佛と言つても如來と言つても何と言つてもよいが、——との固い結び付きを願ひ求めるのですから、

そこから、もう一度、反省しなほして、私どもの日常生活を、更に一層高い光に照して見なければなりませんまい。」

法然上人の御言葉——

「惡を造る身なるが故に念佛を申すなり。惡を造らん料に念佛を申すには非ず。心得べきなり。」

初めにB氏にお答したやうに、たとへ念佛者であつても、世間に惡と呼ばれる行を避けねばならぬことはこの御言葉によつても明らかである。これによつて世間的な道德的善惡の別は堅く守らねばならぬことが示された。

「念佛申さん者も、たゞ生れつきのまゝにて申すべし。善人は善人ながら、惡人は惡人ながら、本のまゝにて申すべし。此の人念佛するが故に、始て持戒破戒なにくれと言ふべからず。たゞ本體ありのまゝにて申すべし。」

こゝで人は道德的な善惡の立場を超えて、宗教的な立場へと轉入する。日常生活の上に人間が用ひてゐる様々のはからひは、日常生活の彼岸に立つて眺めるならば、全く儼々狭く限られたもので、勝手氣儘なものであることに氣付くであらう。宗教的な立場に立つならば、人間的な惡は無論惡であるが、善も亦惡である。惡人は言ふまでもなく惡人であるが、善人も亦一人として善人であり得るものはない。宗教的に言つて、眞の意



味で善と言はれるべきものは、「善惡の彼岸」にあるのである。この雲霧から眺めると、そこには、人間生活の廣大なる視野が眼もはるかに限りなく開けられるであらう。

こゝに掲げた二つの御法語は何れも、上人に常侍したお弟子の勢願房の見聞に基いて、上人の滅後三十年頃に書かれたと言はれる御傳記に載せられてあるものであるが、其の卷末に更に一つの大切な教が載せられてある。それは

「善人なほ以て往生す、況や惡人をや」といふことである。普通には「惡人をも捨て給はぬ本願ときかんにも、まして善人をば、いかばかりか喜び給はんと思ふべきなり。」といふお言葉や、「罪は十惡五逆のものなほ生ると信じて小罪をも犯さじと思ふべし。罪人なほ生る、いかに況んや善人をや。」といふお言葉が、上人のお言葉とせられてあるのに、この傳記に載せられてあるのは、それとは逆になつてある。そこで、色々と喧しい議論になつて、善人が先だ、いや惡人が先だ、上人の御眞意はあつた、からだ、と面倒な事になるが、それはどちらが先でも一向に差支ないことではないか。私はさきに、上人は人間を「罪重く無智の者」とせられて、實踐の方面から言つても、知性の方面から言つても、人間には超えることの出来ない限界が構えられてあることを教へられたとお話した。してみれば、この限られたる人間の限界を超えて、「善惡の彼岸」に立たない限り、

廣大無邊なる佛智を受取ることはできず、限りなき救ひの力である本願力に結縁することも出来ないであらう。

私はそんなふうに話をした。

(完)

法語 そゞろ事のみ思ふ

問ていはく、念々にわすれざる程の事は、わが身にかなひがたくおぼえ候へ、又手には念珠をとれども、心にはそゞろ事をのみおもふ。この念佛は往生の業にかなひがたくや候はんずらん。これをきらはれば、この身の往生は不定なるかたもありぬべし。答ていはく、念々にすてざれとをしゆる事は、人のほどにしたがひてすゝむる事なれば、わが身にとりて心のをよび、身のはげまん程は、心にはからはせ給ふべし。又念佛の時惡業のおもはるゝ事は一切の凡夫のくせ也。さりながらも往生の心ざしありて念佛せば、ゆめくさはりとはなるべからず。たとへば親子の約束をなす人いさゝかそむく心あれども、さきの約束變改する程の心なければ、おなじ親子なるがごとし、念佛して往生せんと志して、念佛を行ずるに凡夫なるがゆへに貪瞋の煩惱おこるといへども、念佛往生の約束ひるがへさざれば、かならず往生する也。(法然上人法語)

南無阿彌陀佛



實 話 英靈に捧げる

萬靈名號供養

本誌記者

「僕は何もお役にたつ事の出来ない人間ですから」渡邊義遠老師はいつもこう言つて終日寫經と讀經念佛三昧に暮してをられる。數ある僧侶の中で、本當に坊さんらしい坊さんの少い世の中に、而も喧騒をきわめてゐる東京の眞中に、寫經と讀經念佛に明け暮れてゐる聖僧に近づき得た事を記者はこよなきよろこびとしてゐる。

老僧は幼にして両親を失ひ、恩愛の情に薄く、あらゆる艱難辛苦の道を歩み十二歳にして東京芝天徳寺に入山、出家得度したのであつたが、同僚先輩の衆僧から常に愚

鈍と罵られ、惡態の限りを盡され、或時は、二三同僚に率ひられて下山脱走し、事さへあつた。老師はそんな事をなつかしげにさへ回想して語るのである。

溫厚な老師が出奔せざるを得なかつたほどの當時の寺院僧侶生活の困難と不始末が想像される。

然し亡き父母への報恩と、育ての親等への義理に引かされて、再び寺院生活に入ることになった。

師は已に早くから己を知つてゐた。自分には何らの學問も才能もない、唯誠意以外

の何物も自分には修得されえないと覺つたのであるが、同僚先輩から面と向つてさげすまれ、ちよいちやくされる時にはひとりでに涙をもよほすのであつた。

一文不知の愚鈍の身も、重惡五逆の極惡人すらもなほもて往生すると言ふ、元祖法然上人の御法語にどんなにか胸の熱くなるのを覺えた事であらう。

ひたすらに彌陀の本願に乗じて渴仰感激の念佛に過した老師の顔には深いしわが過去の勞苦を語つてゐるが何の陰翳もない。七十年の過去に於ける數々の德行について語る人は多いけれども老師の口からは何も聞き出す事は出来ない。老師の語らざる陰徳をこゝに公表する事を記者はつゝしんで控える。

齡已に古稀に達した老師が先年暮に死の豫感に襲はれ、淨寫半ばになつた淨土三部經の完成の爲に病床を離れて、無我夢中夜を徹して寫經を成した事があつた。

老體に奇跡が生じ、老僧のさしにも我弱し切つた肉體、而も明日の死を覺悟してかゝつた無謀な企てが、却つて魔を克服して、再び躍躍たる元氣を取りもどしたのだ。

御佛の慈光に老僧は目をしばたゝかせつゝそのよろこびを記者に語るのであつた。

『その時はもう死ぬと思ひましたので、寫經の製本を取りよせる暇ありませんので、有合せのこの美濃紙に書いたので、こんな不體裁なものでして。……』と必々と記念寫本をながめて語る。

大、小種々の立派に表装された寫本の山積を背にしながら、老僧は尙ほも、横二寸縦五寸ほどの紙片を幾萬となく座側に積み重ねて、丹念に御名號を書き續けてゐた。

手なぐさみにしてはあまりにも眞剣にして美事な御名號の山積に、記者は不審を抱いて尋ねてみた。師は柔和な顔をほころばせつゝ、語るを避けてゐる様であつた。

次々に書き續けられてゆく老師の魂の

偉大な名號をながめてゐる内に自然に名號が口ずさまれて來る様であつた。記者は執腕に質問して何か意味ありげな名號について聞きたかつた。

『支那事變が始まりましてから私は御國の爲に何も役立つ事が出来ませんので、せめても護國の諸英靈の冥福の爲に生きてゐる間は、この御名號を書き續け、祈願したいと存じまして、それに書いてゐる時は無念無想で悪い心の起る餘地がありません』

息も苦しいときへ思はれる起居動作の御老體になほこの様な金剛の勇がある。

『私の様な老人がまだこの世の中に生き永らへて、若い人たちが妻や子と別れて御國の爲に死んで行くかと思ひますと、じつとしてゐる事が出来ません……』

老僧はやゝ暫く冥想にふけつてゐる様であつた。すべての惱みをわが惱みとして、衆生の苦を救はんとする御佛の慈悲心の様にそれは堪へ得ざる苦しみの様でもあつた。

た。

『毎日、新聞に戦死者の名を見ますと私はたゞ胸がふさがるばかりで一枚でも多く版樂に往生します様にと祈願しながら名號を書き續けてゐるのです。』

日に幾枚位お書きになりますかと記者は胸ふさがる瞬間に堪えかねて話題を軽くした。

『日に千枚位は樂に出来ると思ひまして二三ヶ月には十萬枚位はお弔ひ出来ると思つて始めましたのですが、中々日に五百枚も大へんです。』

字一句を稱名の内にきざむ様に書き續ける渡邊老師の目に眞剣なものが光つてゐた。

戦争が長びくにつれて口さきばかりで銃後の守りを云々する人々は次第にその陰がうすれて來た折に力強いこの念佛者の變らざる信念と祈願に、英靈は永久に眠る事であらう。



想 隨

人

生

坦

々

中 野 尅 子

□吾が人生は、今日で終りだと思つても、

コレでいい。私は、いつまで生きねばならぬともきめて居らぬ。又、いつまで生きたいと思つて居らぬ。生きる方は、生かしてゐて下さる如來さまにまかしてある。私の生命は、私の生命であつて、私の生命でないから、私は、私として「爲すべき事」をコツ／＼とやつて行けばいい。それだけがたのしみだ。

□一生の内に、コレだけはやつて置きたい、これだけは是非ともやらねばならぬときめて居らぬ。百まで生きてやつても、どうせ、途中で死んで行くのだから、仕事を全部やらねば死なぬときめて見ても初まらぬ。人

生は、いつでも道中、どこまで行つても終

駈のない中途半端で終るのであるから、ソレで安心が出来て居らねばいかぬ。又、それであつて一日／＼一事／＼が、完成で、完結だから、有難いぢやないか。それで、私は、死ぬ事くらゐに心配はして居らぬ。

仕事に未練もない、未練がないときまつてみると安心して、コツ／＼、悠々と爲し遂げられる。實に私は、たのしいものです。

誰か、「信心に御なぐさみ候へ」と云はれたが、私は「人生に御なぐさみ候へ」と云ひたい。それが私の信仰だ。

□人生は、苦しむ處でなく、楽しむ處だと思つてゐる。苦しみに出て來たのでなく、

たのしみに出て來たのだらう。ところが、お釋迦さまではないが「人生は苦なり」と云ふて、苦しむ處にきめてゐる。そして如何にして此の「苦」を制服せんかと苦しんでゐる。勤苦六年とか十二年とか云ふのは、正に此の「苦」と四ツに取ッ組んだ大相撲のところである。

そんなものに勝たうと思ふからいかぬ、負けて置けばいい。成程、苦の世の中だから苦しんで行けばいいと負けて行けば、堪々たるもので、其の後の一生は水の流るゝ如くのんきだ。苦の中に入つて、苦と共に生きれば苦が目につかぬ。苦もたのしみである。貧乏も貧乏に落ち切ると貧乏が面白くなる。病ひも、病ひに入つて病ひと仲良くなると、病ひがなつかしくなる。況んや、此の「苦」の外に、樂がほしいとか、樂でなきやいやだとか云ふて、駄々っ兒のやうに駄々をこねる必要もない。結局、苦も平氣、樂も平氣、悠々閑々、なるやうにならして置いて、なるやうに、ならして行く。

コレが人生のコツだ。

□かといふて、此の非常時をヨソにして、自分だけ泰平で居ればいゝかといふと、そうではない。非常時来たとか、戦時来たとかいふて驚くからいけない。いつの世にか、非常時が去つて、非常時でない時が来るだらうか。いつでも、これ位の非常時ばかりであり、これ以上の非常時にばかりなつて行く。これ位の緊張や、これ以上の緊張は、當り前で、樂々と引請けられねばならない。

國難呼ばはりはまだ早い。臆病犬ほどおびへて吠へる。こんな事で神經衰弱になるようでは大ものにはなれぬ。

□世間の人氣バカリを當てにしてこそ、と商賣をやつたり、大向の氣受ければかりを心配して、政治をやつたり、創作をやつたり、宗教をやつたりしてゐる者がある。そんな者は世間にモテルやうになつた時が、世間から葬られる時だ。風によつて釣り上げられた風が、風によつてタタキ落とされ

ると同じだ。

□一本の絲によつて揚つてゐる風は、風が強くなればなる程、絲を縮めて揚る。

風が弱くなればなる程、絲を伸ばして揚る。地上に風の無い時でも、上空には風がある。

風の無き處に風を見出して揚るのでなくてはならぬ。それが眞理によつて生きる者の強さである。いや「易さ——」である。

□風といへば、風は上げるときより、下ろす時の方が六つかしい。人生も乗り出す時よりも、引込むときの方が大切だ。

上がる時に「風」が上げて呉れるが下りる時は、「絲」によらねばならぬ。

人間は、その「下り口」を見ると、本當の値打がわかる。「絲」の尻切れの風なら、下手に揚らぬがいゝ、タタキ落とされる元だ。

□得意の時より失意の時に、本當の腹がわかる。儲けた時より損した時の方が、本當の腕がわかる。

信仰の力は、地獄で光る。

□極樂は——極く樂な時で、人生には極く樂な時といふものは、そうあるものでない。そんな時には信仰の無い奴でも泰平で、櫻かざして今日も暮しつた。而し、極く樂でない、地獄の時を、極樂にして通つて行けるのが信仰だ。だから信仰の人には始終、地獄が極樂であり、信仰なき者には、極樂が地獄である。そんなに違つてゐる——。

□私は、一日／＼がたのしい、一瞬／＼が實に有難い。良きも悪しきも、苦も樂も、悉くを溶かして滋養として吸ひ、あの畑の中の大根が、頭から糞尿をブチ掛けられても肥料として吸ひ、ます／＼肌白く太つて行くやうに、育つてゆける自分を有難く思ふ。かといふて又、自分の前途を阻む、あらゆる障礙は、大象が一切を踏みつぶして進むやうに、遠慮會釋なく踏み破つて進められる、實に痛快だ。人生は、タンクのやうに進めることが、又、一番の幸福ではなからうか。



代田 重雄

その家は「花安」といふ屋號をもつた花屋さんで、ある大きなお寺の廣い墓地の裏通りにあつたので、春と秋のお彼岸にはわけでも手向けの櫛やいろ／＼な草花を買ふ人達で、目のまわる位いそがしく繁昌してゐました。

主人の中山喜太郎さんといふのは私と小學校時代の同級で、私の一家がこの春この町へ引越して來ると偶然にも昔の記憶がよみがへつて來て、知合ふやうになりました。子供時代の思ひ出位懐しいものはありません。そんな譯で、私は時々この花安の店へ出かけて行つて、お佛壇へ上げるお花や、机の上に置く一輪差の花など買ふのでした。

喜太郎さんは十一になる勝夫君と、八つに

なる武君の二人の男の子がりました。どちらも快活でさつぱりした少年でした。私は初めて會つた時からどの子供も好きになつてしまひました。

ところがそのお父さんの喜太郎さんに召集令狀が來て、喜太郎さんは歡呼の聲や旗の波に送られて、勇ましく出征してしまひました。

「——さん、たうとう來ちやいました、斯うなる事は覺悟してました、この上は一生懸命お國の爲に働いて來ますから、留守中何分お願ひ致しますよ」私は出發の際、古ぼけた軍服に五分刈頭をベコンと下げてかう言つた喜太郎さんの言葉も、姿も、忘れる事が出來ません。喜太郎さんが出征されてからは、今までとは違つて急に手が廻らなくなつてしまつてお店の草花までが元氣なく萎んでしまひました。

二

それから私の花安へ行く事が次第に多くなつて來ました。その度に要りもしない花を買つて來ました。

ある朝です。

「お早うございます」と勝手口の硝子戸を開けて、子供らしい御用聞きが聲がしました。おや？ と思つて出て見ると勝夫君でした。

「あッ！ 小父さんの家此處、ぢやいゝです」勝夫君は氣まりが悪そうに戸を閉めてしまひました。その意味が分らなかつたので、表へ出て見ると、眼の覺めるやうな水々した花を澤山積んだリヤカー、其處に待つてゐて、弟の武君がこつちを見てニッコリと笑ひました。私は初めてその意味が分りました。店へ來ていつも花を買つて呉れるのを押賣りがましくしては悪い、と子供心に思つたに違ひありません。その子供らしい正直な勝夫君の心がいぢらしくなつて、私は呼び戻して、いつもより澤山花を買つてやりました。その花を持つて久々で先祖の墓參に行かうと思つたのです。勝夫君達の爲に却つて私は良い事をしたと後で思つた位でした。

それからといふもの、勝夫君と武君の二人は朝早くから起きて、學校へ行く前の一しき

リリヤカーに花を積んでお母あさんに代つて花賣りに出る感心な事が、町中の評判となりました。そして町の人達は他の花屋より、この勝夫君達の小さい花屋の御用聞きに来るのを待つてゐて花を買つてやりました。

三

萎れてゐた店の草花が元氣を取戻しました。「勝夫と武が一生懸命に世話をして呉れるのです、御覽下さい、花だつて人間だつて同じ事ですね、こんなに生々として來ました」お母あさんは如何にも嬉しさうに私にかう言ひました。

その夜の夜店に行くとい紙に包んだ花束を持った高井先生にバツタリと出會ひました。高井先生は勝夫君の受持の先生で、私は日頃懇意の間柄です。

「素敵な花ですね」と私が言ふと、
「ええ、今この先に出てゐる勝夫君の露店で買つたんですが、しかし感心な少年ですね、お父うさんが出征されてから學校の成績も良くなつたし、出征軍人とお父うさんに持つた

少年はやつぱり違ひますね」高井先生は涙々と斯う言ひました。高井先生に別れると、私の足は勝夫君の露店の方へ急ぎました。その翌朝、勝夫君と武君の花を積んだリヤカーの通る時刻、私は家の中から硝子越しに



外を見てゐると、いつもその時刻に來る筈の勝夫君の妻が見えません。騙でも悪いのかしらと私は思ふと、何故かヂツとしてゐる事が出來ず、勝夫君の家へ行つて見やうと急いで外へ出ると道の向ふの方から、勝夫君の花を

積んだリヤカーがやつて來ました。「勝夫君！—私は嬉しさのあまり、斯う大聲に呼びかけました。そして、良かったなあと思はず心の中が言ひました。しかしいつもなら元氣にニッコリと笑ふ勝夫君が、何んとなく悄然としてゐるのです。

「武が熱が出て寝てしまひました」勝夫君は寂しさうに斯う言ひました。成程いつもリヤカーの後を押して來る武君の姿が、今朝に限つて見えませんでした。私は夕べ夜店で勝夫君の傍にひよんぼりと立つてゐた、武君のさびしさうな姿を思ひ出しました。

「よほどひどいの？」

「……」勝夫君は黙つてうなづきました。

私は暫く、淋しさうに動いて行く勝夫君のリヤカーの後姿を見送つてゐるうち、胸を突いてこみ上げて來る涙をどうする事も出来ませんでした。そして、

「武君！ 早く歸つて呉れ、皆の爲に」と私は何物かに祈る氣持で、武君の家の方に次第に足を早めました。



近信二片

豫期以上の成果を収めつつ上海、南京、蕪湖、鎮江、丹陽、常州の回向を終り申候、特に支那側に興へたる感觸は大なるものこれあるを喜び居り一行至極壯健力行努力致し居り候 (五月二日常州にて) 吾等一行毎日無事巡禮致し居り到處意外に歓迎せられ喜び居り候、日支兩方官民より多大の感謝相受け居り候、殊に支那官吏は治世の一大援助を得たるものと歡待至らざるなく毎日縣知事又は市長の招宴等あり支那料理せめに會ひ居り候、支那寺院は皆立派なれど戦火の爲め多大の破損ありて氣の毒に候、大寺の住職は皆何れ

法衣の牧將軍

見山望洋

寫眞説明
向つて右より
白崎嚴成
牧少將
大村桂嚴
平岡少將

へか避難轉地し居りて逢ふことを得ず遺憾に候 今日午後蘇州に向ふべく同地にては五日日支合同追甲會、大講演會といふことに相成り候、兎に角有意義の宗教行脚となり候 (五月五日 無錫にて)

前者は牧相圓將軍、後者は芝中校長大村桂嚴師よりの近信である。

鐵錫萬里

揚子江四千里、蕩々として流れて支那海に入る。下流幾百里の兩岸は殆んど茫々無際の際の平野、眼を遮る山もない。今頃は稲は青々として尺餘にのび、白い鷺が其の間に遊んで居るであらう。柳も楡も青々としてるだらう。

このはてしない平野を縫ふて、茶色の法衣の袂ひきしめ、饅頭笠をかむり、錫杖うちふり、小手、脚絆、白麻の草鞋に身をかため、邑から邑へ、町から町へ、城から城へと經を讀み、念佛を唱へ、塔婆を立て、香華を手向けつゝ、回向供養の巡禮の一隊がある。この一隊の巡禮こそ陸軍少將牧次郎法名相圓法師、前陸士教授大村校長、哲丈海岳の兩漢である。

廢墟の花

爆彈に、砲火に、地雷に、戦車に打ちこわされた城廓は、邑は街は、山なす煉瓦の破片と累々たる石くれと、破れた家歪んだ門、焼け残りの軒微塵の窓、げに聲もなき

廢墟である。それでも戦火以來年餘が經つ。偶々風が持て來たこぼれ種からこの死んだ煉瓦の間からでも雜草の花の一つ二つは咲いてるだらう。まして日の丸の旗ひらめく復興の街々には、鬱鬱たる生氣が漲つて新興東亞の意氣旺盛な清泉がほとばしつて居るだらう。

この死の町のこわれた煉瓦の下こそ、城廓の、廢墟の、トーチカの邊りこそ、わが戦友が眞紅の血しほをそそいだ靈地だ。

この村、あの丘、鐵道も、橋梁もげに尊い帝國軍人の生命をつぎこんだ靈地だ、この犠牲によつて抗日の惡魔を拂ひのけて、この花とこの泉とを掘り出したのだ。

この英魂祭るべく、靈地訪ふべしだ。

天人はおのが枯骨に感謝の禮拜を送り候鬼は淺ましきおのが死屍に鞭うつといふが、誤つて蔣家の走狗となり、大死をした支那兵や、まして戦火に呪はれ路の邊の露と消へ、訴ふるに所もなき無告の冤靈に至つては、不愍といふも愚なりだ。花最月

夕、雨の夜風の日遊魂離魂、鬼哭も愁々たるのがあらう。

興亞の人柱

「日軍百萬杭州上陸」で敵艦を塞からしめた敵前上陸軍司令官柳川中將麾下に其人ありと知られたる勇將當時の〇〇長牧次郎少將は熊本市の現住、河内國神足驛附近の某寺は其祖先三百年前の開創にかかる菩提寺で、祖先以來佛教の信仰に培はれた一家である。駒澤大學配屬將校時代に軍學にも凝り、參戰もした。武備あるもの必ず文事あり、將軍軍に一介の武辨にあらずと思はれる。將軍は戦争の眞只中に血しほの底に咲く廢墟の花を見た。地雷の唸る眞只中に荒城の底に涌く靈泉を見た。興亞聖戰の目的を達するには、この廢墟の花に培ひ、この清泉を掘下げ、路傍の枯骨を拾ひ、興亞の人柱を祭り、無告の魂魄に呼びかけるにあることを感得されたのである、附屬奴ではない。凱旋後一心とみに燃ゆるばかり、京都知恩院門跡郁芳大僧正に就て出家得度さ

れた。將軍得度の日、自書の發願文の奥にこう記されてあつた。

奮直進別

不惜身命

決定往生

と。これは將軍自得の偈である。

法然上人へ

將軍はなぜ華頂山で得度し、法然上人に來られたか。それはすべて因縁である。因縁の純熟である。而してさらに將軍は慈眼等視あまねく怨觀を弔はんとせらるる心の底には、敵を抱擁し怨を恕るし、怨讎を超越して解脱の一路に進まれた法然上人出家の動機には特に思慕と共鳴と感激を致されたであらうことは推しはかり得らる。

徳孤ならず

將軍の出家に滿腔の隨喜を寄せられた時の中支軍最高指揮官松井大將を始め、陸海軍首腦者、中支各期の司令官各位も、いたく將軍の巡禮回向に賛同せられてあるやうにきくのであるが、現地の反響は尙ほ更ら喜ばしいことであらう。



一體いつ頃から鮭と云ふものが出来たかと云ふと、確定的な事は不明であるが、起元物語を窺ふと、古くからあつたものらしく日本に於いての鮭の始まりとでも云ふか、起元物語に次のやうな、實に趣味深い物語的な事が見えてゐます。それは今から凡そ千百餘年前、嵯峨天皇の御代、淡路の國の磯邊に一老婆が住居してゐた、そして毎日磯へ來ては、飯脛を洗ふ事を日課としてゐた。或る日、何處からか

一尾の小魚をくはへて鵜(みさご)と云ふ鳥が飛び來て、岩穴に入れるとその儘飛び去つて行くのを老婆は毎日見てゐた。そしてその小魚を我家へ持ち歸つては食べて了つた。翌日その岩穴へ行つて見ると、又小魚が入れてあるので持ち歸つては食べてゐたのであるが、餘り氣の毒と思つたか、翌日洗ひ流しの殘飯を、その穴へ入れて置いてやつたが、鵜はそれを食べず、翌日岩穴へ行つて見ると、その上へ小魚を置いてあるので、はか

らずもそのものを食べると、魚と飯の融合された味が、何んとも云はれぬ美味であつた處から彼の老婆は早速家へ歸つてこれを作り附近の者へ馳走した處、その美味をめたと云ふ事であります。その折り、老婆が桶で作つた所から鮭の入れ物は桶を第一としてゐるそりであります。この鮭を鵜の鮭、又は鵜の鹽味付と名付けられてゐます。天明の俳人蕪村の句に鮭桶の事を見ます。

鮭桶を洗へば淺き遊魚かな

蕪村

「景行紀」に、みさごは鵜賀鳥と云へり、形鵜に似て深目走黒色なり、水禽には非ずして水邊に魚を撈り食ふ或は魚を取貯へ岸の沙石の間に積み

置くを、みさごの鮭と云ふ。漁人或は好事の人探し得て不加鹽醬して食ふ味は、人の作れる鮭に似たりといふ。「本草啓蒙」に、深山の巖陰に魚を多く積重ね置くを、みさごの鮭と云ふ。是多の貯へなり、人これを取るに重ねたる下の魚を取れば、迫る新に魚を含み來りて積重ねぬ、もし積たる上の魚を取れば、再び含み來らず、又樹枝の繁茂した處に柴を積して、その上に魚を積重ねたるもあり、此等の鮭久しくなりたるも腐らず人取つて賞食すといへり云々とあります。

○ 江戸に始めて鮭屋と云ふものが出来たのは、「江戸鹿子」に

もある如く今から約二百四十年、貞享四年頃であつて、四谷舟町の横町に近江屋、駿河屋と云ふ鮓へ數日漬けたる物」と食すしの二軒一ヶ所に鮓店があつたと云ふ事ですが、桶に漬けたんだ古鮓或は早鮓と云ふ一夜ずしで差魚藏魚の生なる魚味を商ふた近江の鮓鮓的の大衆物の簡易な嗜好物では無く、「食すし」と云ふが、現今の如き握り鮓の形式では無かつたのです。

趣味



「雍州府志」に一夜ずしの仕様が記されてゐる。鮓の鮓を苞に入れ、焼火にあぶりておもしろくかくる。又は柱に巻つけてしめたるもよし、一夜にてなるゝに云へり。此外、鰯魚干魚等を漬ることあり云々とあります。蕪村の句にこの壓し鮓の趣きが躍如として實に妙味あるものです。

鮓や今宵の蓋をとらまし

貞佐

蕪谷

と温故集に見えてゐます。丸き桶のうすきに古い傘の紙を蓋にして幾つも重ねて、鮓のすし、鮓のすしと呼んで賣り歩いた鮓賣りが「後はむかし物語」に見えてますが、この鮓は數日漬け込みの古鮓であつて、漬込み鮓ではないのです。現今の鮓と云ふものを賣り出したのは、寶暦頃からで、當時京都中橋の「おまんがべに」と云ふ居所の地で賣り始めた當座鮓が現今の鮓となる形式の始めであるらしい。

又寛延頃の繪圖に涼み臺型の上で、鮓賣りと鮓籠と傍らに行燈を置いた兩國橋廣小路に鮓を賣つてゐる當時の姿を見る事が出来ます。

その後、文化の頃、深川六軒

堀に「松がずし」が出来て世上の鮓の風趣が一變したのです。元禄期に「すもし」と云つて幾日も漬けたんだ古鮓、早鮓を珍重して食べたやうですが、江戸ッ子としての手取り早い鮓の形式となつたのは化政度の事で、現今の關西風の壓し鮓では、當時の新人江戸ッ子の氣風と食物の嗜好の差から堪能出来ず、手取早く、且つ鮮味で、おつである處の簡易の物、所謂、重口味の關西風と、その氣風を異にする庶民階級の江戸の時潮から必然的に、淡味的のものが好まれた結果、握り飯では無いが、握りと云ふものが出来たのでせう。

藤木杜子



新 綠 慰 問 行

本會婦人部

渡 邊 榮 子

卯月二十四日ひるすぎ、やがて一時に真近いと思はれる頃を大藏臨時分院慰問の爲に澁谷驛の東寶映畫撮影所行バスに乗る。

數日來ぐづぐづしていた天候が今日は残りなく晴れて深い青空が高く澄む。街路樹のすどかけ若芽が小さく微風にそよぐ。緑の出初めた麥畑の間に自動車學校や放送研究所を見つゝ、秩父連峯の黒い山かげが遠い森の上にうづくまる頃豫想していたより遙にお粗末なバラック建の分

院につく。

荒川區の小學校の先生だといはれる慰問係の方に案内をされて、長い廊下を一番奥まつた演藝場の樂屋に落付く。此度の慰問に長唄と舞踊の演藝班が會員長田氏の御奔走やら、杵屋勝志賀氏の御厚意によつて組織され、行を共にされたからであつた。

廊下の隅に立ち止つた兵隊さん、演藝慰問ですか、と云つて、美しい長い袂をかゝへたお嬢さんをつかまえる。何處へ慰問に行つても一番兵隊さん等に歓迎されるのは、相變らず小さいお嬢さん等で有る事よと、思はずこの可愛い、慰問班に微笑をもらしてしまふ。

★岳陽樓に立つ★
人見部隊 安田秀賢
四月十五日午後二時、戦艦の合間を得て多年憧憬の岳陽樓に行く。町の十文字道路を北へつて爪先上りの大道路を千米程行くと右手に煉瓦造りの巨大な○國の天主堂、左手揚子江岸に岳陽樓がそゝり立つ。
揚子江の流れに向く樓は西面の三重樓で丸瓦の黄色い屋根造りは信州信濃の善光寺に似てゐると思ふ。
西正面の向つて右手に六角の望樓あり、二重樓で鐵梯子をのぼれば御用船の船員の人が三人前方の風景に見入つてゐる。その後が靜堂、正樓の左手は休息樓とも稱すべきか、眞四角な二

にぎやかな事。これ等の方達の國家の爲再び銃後に於ける全き御活動の日を豫想しては、嬉しくも心の明るくなる思ひである。

やがて演藝場で小さいお子さん等の長唄が初められた頃、控所に、

「私がこゝの分院長です」と胡麻鹽のお餅を短かく生やした温容溢るゝばかりの分院長殿が御挨拶をされる。そしてしんみりと、演藝場等には思ひもよらず、一般慰問さえ餘りなく、したがって慰問品の配給も少ない氣の毒な状態にある隔離室の患者さん等の事を、こまゝとこのべられる。私共にもその事は一番深く心にかゝつてゐる問題であつた。かつて立川の病院を慰問し

た時も少數のそうした患者さん等の爲に、特に生玉子を用意していつた事等もあり、「見舞つてやつて下さい」とは仰しやらない分院長殿のお心持を思ふと私共は一も二もなくそれ等の部屋々々を見舞つて上げ度い心持に馳られるのだつた。

無論病氣の種類程度にもよるであらうけれど、同じ隔離病患者としても、温かい分院長殿のお心づかひに抱かれたこゝの兵隊さん等はどんなに幸な事であらうと、ふと今までの伺ひ見る事も出来ないで来た外の病院の事を想ふ。

キャンデーの箱と、淨土の幾冊かと、會員小山氏より託された小學生の慰問文と慰問畫の全部をかゝへて案内の婦長さんに

從ふ。

途すがら

「行くのならマスクをかけていらつしやい」と婦長さんからの注意を受け乍ら、演藝場の方に駆け出してゆく患者さんに出逢ふ。

容器沸の瓦斯の焰が人氣のないう小さい調理場に青くゆらめく。

終始つまましい微笑をもつて婦長さんは、こゝに働いて居られる二十人ばかりの看護婦さんの全部が隔離室の方のお世話をして居られる事を物語られる隔離病室を回つて酒保の隣りにある控所に戻ると、丁度慰問に來られた東寶の女優さん等が、こちらの演藝の終るのを待つて居られるところであつた。

重櫓、正面の岳陽樓、二重の上に岳陽樓の金文字が金色に光る。櫓に入れば、この櫓を讀める詩を木版にほつたのがズラリと掛けてある。その中の一二を拾つて見れば

十五年勝地重游雲外神仙應識我、八百里長天一覽湖邊風月最宣秋

二階に登れば天井よりつり下げた四角な燈籠四つ。部屋外をグルツと廻るやうに出来てゐる。

三階に登れば厨子があつて、厨子の奥に老夫子、その前に如何にも大陸的にのんびりした道人一體、その左手に顔面は猿でその頭部顔面は、金色、胸部は黒腰は赤の脇士、右手の童子は左手に瓢箪の赤いのをもつてゐる。その道人の頭上の金色の額に「貫通三教」の文字あり。又

演藝場に入り切れない兵隊さん等は勇敢に控所の入口から女優さん等をのぞく。

高瀬氏が「浄土」を手に引率者の英百合子女史をつかまへて、どうぞ御感想文をと、ちよつと職業的意識をのぞかせる。

舞臺では舞踊が初まつたらしくお囃しの音が一段と冴えて聞える。是れは何の花か紫が、

つた紅い花が麗な陽さしを受けてかゝやく花壇の中を、長唄をすませたお嬢さん等を引具して一人の兵隊さんが散歩しておられる。時折はしやがんだり、或は中でも小さいお嬢さんを抱き上げたりしながら……郷里にお子さん等を残して來られた方でもあらうなどと語り合ふ。

長唄と日本舞踊の終つた後

に、東寶映画の方達の漫談や輕音楽がある。ギターやアツコー

デオンの伴奏で霧立の唄など、兵隊さん等の後から會員諸姉も夢中になつて背のびをする。

演藝がすんで演藝場から兵隊さん達が各室に戻られるのを待つて、それ／＼の御部屋をお見舞してまわる。

夕食が五時からと聞く、その時刻ももう近い。心せく中にも、芝區から出征された方、又出征のさい増上寺に宿泊された方等、いづれもなつかしさに名乗出でられて、短かい時間を何やかやとお話を伺ふ。退院なされたら讃仰會へもどうぞお遊びにと申上名残をしくお別れをして再び長い廊下を歸途につく。「又來て下さい」と大きい

お聲が何處かのお部屋からか聞えて來る。

振返れば畑地に建てられたせいであらう、樹木らしい立木一つも見えないあらはなその木造建物。夏はさぞ暑い事であらう。

武藏野を吹きまくる木枯の風の壁のないあの部屋々々の寒さはどんなであらう。その中に隔離され久しく療養を餘儀なくされてゐる人達の上は……

私はその方達丈になりとせめて月々の「浄土」を讀ませて上げ度いと想ふ、精神的にせめて豊かにして上げ度いと切に想ふ。

しつとりと水氣を含んだ畑の上に目を落せば、荒涼とした戦の姿がふと胸にいたく感じられるのだつた。

この厨子の前にこの像の來歴の文あり。

此尊像在唐朝時代名呂純陽在朝爲宰相不願做官看破名利世事老子道教修成了中八洞神仙建立岳陽樓唐朝到至今有壹千三百餘年

四十歳前後の僧侶が三人横に立つてゐる。木魚も鐘もあれば去る日の桑門恩師急逝を肅然として、此處岳陽樓上、木魚の音に、三誓偈一卷念佛數念を誦す。三人の僧侶は私の經を始め、合掌して私の顔を見る。筆をかつて紙の上に浄土宗知恩院末徒としたゝむれば三人の僧は長跪合掌する。

噫、我れ今岳陽樓上に立つ。中支最前線、空には雲が流れてゐる。直下の揚子江上に嚴然と〇〇艦が城の如く浮んでゐる。

筆隨

家畜



篠原文雄

馬

いつたいに山村の人々は、家畜を眞心から愛するやうである。馬と牛は農家にとつては主要家畜である。私の田舎は甲州八ヶ岳山麓の僻村であるが、村の過半数の農家では馬を飼養してゐた。しかし、支那事變發生とともに、軍馬として徴發されたため、馬を飼養して

ゐる農家は激減してしまつた。事變になつてから馬の値段が急に騰つて並一頭が二、三百圓といはれ、二百圓を下るやうなものは絶対にないときいてゐる。徴發された軍馬は成可り高く買はれたが、賣り値が高くなれば買ひ値が騰る道理で、今では馬を買はうと思つても、安い金では手に入らないのである。高く買つてもらつても、この

ていだらぐだから、飼馬に病氣で死なれた中農以上の農家では、もう一度馬を飼ひたいと思つても、手に入れることはむづかしい。ずつと以前は馬無盡といつて親分やら親戚やら近所の人々が寄り集まつて馬を購ふ算段もついたが、今時馬無盡の相談に乗る人は無いのである。馬の増産をはかるにも親馬がないのだから、何んのかんと、お百姓が愚痴をこぼすのは當然である。

馬となれば、どんな貧しい農家でも無理算段して飼ふのは金が欲しきからでなく、たとへ田畑を賣つても馬だけは手放さないといふ愛馬心からである。

愛馬心といへば、私の村では馬のことを「お寶」とよんでゐる。お百姓にとつて、まるまると肥えた馬をもつことは、繰繰よしの娘

をもつたやうに自慢になるのである。馬が病氣した時など、はたの見るのもいじらしいくらゐに心配する。出産でもあれば吾が子が生まれたと同じやうに喜んで、「お寶」の誕生だといつて神機にお燈明をあげて、行末の安泰をお祈りする。

農家では母屋の片隅に厩舎をたてるのが慣はしだから、家族のものは馬と全く同居のかたちである。夏は馬にたかる蠅や蚊が家内中をとびまはるうが、氣にかけずにゐるのも愛馬心からである。長雨の時、雷の折り、大雪の季節には厩舎の前で寝ずの番をすることもある。また糞を洗つてやつたり、炊事ごとに米のとき汁を飲ませるなど、お百姓の馬への構ひは格別である。

馬は妊娠十二ヶ月で出産する。

馬の産時にはお百姓の氣苦勞はたいへんなもので、獸醫をよんで診てもらつてから、好物の人參を與へたり、鹽水を飲ませたり、軀を撫でたりしていたはつてやる。

仔馬は生れると直ぐおぼつかない足どりで、屋敷の外を歩きまはつたりする。臺所などまで出てくると、これを「龜參り」に來たのだといふ。四肢の長い如何にも可愛らしい仔馬が嬉々として親馬の周りを歩き廻つたり、或は無心に乳を飲んでゐる可憐な姿は、見た眼に微笑ましい。

またそれを母馬が慈愛のこもつた眼ざしで一瞥する姿など、親子の情愛が偲ばれて床しい。私の田舎では仔馬のことをトウネツコといふ意味であらう。

私の家の馬は十四歳の老齡をか

ぞへるまで生きてゐた。八歳頃から春秋の農耕にも役立たなかつた。私たちが家敷の界限を乗りまはすだけで子供相手にしかならなかつたが、私の亡くなつた父母も乗つたことがあるといふ馬なので、家の人たちはみんな大切に育てゐた。

私の亡父は田舎醫者だつたから、患家への往復に乗りまはつた。さういふ記念の馬だから父の形見のやうに思はれてならなかつた。性質の溫和しい馬だつたので、一時は牛と同居したこともあつた。厩舎の梁に吊された鶏の巢箱から、數羽の鶏がいつも足どまりのやうに馬の背にとまつて、戸外にとび出したものだが、それをうるさがりもせずにあつた有様が眼に浮んできて、色々と懐しく思ひ出されてくる。

馬喰とか伯樂といつたのは昔のこととで、今ではみんな獸醫とよんでゐる。昔の伯樂の多くは軍人上りの人で、在營中馬に關する知識を習得したものが、除隊すると蹄鐵工になるとか、伯樂を開業したものだ。今の獸醫は獸醫學校の出身者であるから、昔の伯樂とはちがつて立派な獸醫先生である。

私の村には獸醫が一人もなく、西隣りの多摩村に一人の獸醫がゐたが、昨年の秋出征してしまつたので、馬の病氣の時には、五里も離れた中央總長坂町からわざわざ來てもらはねばならない。遠路の往診だけに注射一本してもらつて十圓位はかゝるし、それに自動車賃とか、飲食代などもかゝるから、馬の病氣も人間並みに、むしろそれ以上に費用を要するわけである。

死んだ愛馬の記念のために、馬頭尊(馬頭觀世音)や馬力神の碑は到る所に建てられてゐる。村の藪の袂などによく見かけるが、誤つて馬を崖から落した人、馬を失つた人などが供養に建てるわけである。碑の前に馬具とか、藥であんだ鞍を供へたりするのは、いはゞ形見の品で、これをさゝげて馬の無難を祈るのも、哀れ深いものである。

舊二月の初午の夜と、七月十日の夜と二回、隣り近所の馬の持主がそれぞれ當番の家に集まつて、關東關西の百番の札所の觀世音を祈る風習がある。男衆にまじつて女子供までが鉦をたゞき、お供への團子を食べながら夜半までも供養する。

昔は馬伏といふ行事があつた。馬伏場といふ一定の場所に馬を集

めて、伯樂が肢の蹄を短く切つたり、齒齧や肩や肢などへ針をさして惡血をとるのである。惡血をとるといふことは如何なる理由かわからぬが、妙な風習があつたものである。暴れ馬に鼻ねじりをさして暴れぬやうにしたり、又は四肢を太い綱でしばつて強引に引倒すのだ。所謂馬を伏せて手術を施したものである。今は蹄鐵を打つ時に蹄を切つてくれるので、馬伏せを行ふ必要はなくなつたのである。

牛

私の家では馬一頭のほかに、ホルスタイン種の牛二頭を祖父が遺業で飼つたもので別に目的はなかつた。牛の性は鈍重とされてゐるが、私はそれ故に家畜の中では牛が好きだつた。部落で牛を飼つて

ゐる農家は一概もなかつたので可成り評判だつた。祖父にはそれがひどく得意だつたやうである。

私は、二、三度牛の分娩に立會つたがまことに手際よく分娩するものだ。牛は生み落す瞬間まで、秣を食べてゐる有様で悠々たる分娩振りである。分娩のその朝、私たち一家のものは揃つて庭に出た。牛は朝から庭の眞中で、踞まつたまゝ秣を食べてゐた。五分おきくらゐに起ち上つては太い息をはきながら、庭を一周してまたものやうに踞まるのだつた。牛が起ち上るごとに作男は「これは難産らしいぞ」といつて、穀穀を薄く敷いた箕をお尻にあてがつたまゝ、牛の歩くとほりに従つた。私たちにはそれが面白くて、牛の分娩より下男の周章てゐるさまが滑稽でならなかつた。そんな仕草の

後、三十分ばかり経つてから人手をかりずに分娩したのである。

産まれた仔牛は羊ほどの大きさだつた。薄皮に包まれたまゝ産れたのである。獸醫の指圖で、作男は薄皮の上に鹽を振りかけるのだつた。母牛は丁寧にいたはるやうにしながら薄皮をきれいなめつくした。この生物は間もなく躍動を始め出した。此の仔牛が産まれたといふので、祖父をはじめ皆んなが大喜びだつた。これが反蝶に牡だとひどく失望する。分娩早々でも牝なら乳牛といふだけで當時は八十圓、百圓と高値をよんだものだから喜ぶのも無理はない。牡だとそれこそ惨めなものである。産まれた仔牛は五時間位経過すると、四肢の躍動が活潑になつた。も早起ち上りさうな氣配さへ見えるのだつた。その日の夕刻近く。

仔牛はどうやら起ちあがつた。然し見た目には如何にも危なげな足どりだつた。母牛の乳房にむさぼるやうに吸ひつくさまは、眞實に可愛いものである。二日目の朝になると、仔牛は立派に起ちあがることが出来た。如何にも仔牛らしい形態をそなへてきたのである。

母牛は分娩してからさすがに氣力が衰へて見えた。分娩した當座は乳房がたゞれていたいいたしかつた。仔牛がやたらに吸ひつくためである。作男は腫れあがつた乳房をさするやうにして乳を絞つた。またゝく間に馬穴にいつぱい乳は絞られた。一週間位の間は乳が血をふくんでゐるので飲むことは出来ないが十日目位になると、毎朝新鮮な牛乳を壺に入れて近所へ配つたりするのは私の役目だつた。(終)

信仰相談 擔中村辨康

往生後の衆生救済は？

問

善導大師の發願文に淨土往生後「十方界に入つて衆生を救攝せん」

とありますが、現實の世界に出るには業力の束縛があつて自由に出来ないと思ひますが如何でせうか。それは十方に分身する眞如的感應か、頭出自沒の流轉的隨緣による濟衆か解りません。四大分離後の淨土觀、救濟觀を御教示下さい。

(荏原・愛讀者)

答

自分丈が救はれれば他人は何うでもかまはぬと云ふやうな信仰は無

論本當の信仰ではありません。自分の惱みが痛切に感ぜられる限りに於て、他の多くの人々の持つであらうと想像するところの苦惱を無くして上げたいと念願する氣持は、當然信仰深い人の持つべき心です。一般の物理現象でさへも求心力が強ければ強い程、遠心力も強く起つて來ます。また生物的現象でも「自

己保存」が念願される半面に種族保存即ち「生殖」と云ふことが、自然の要求として出て來ることは御承知の通りであります。かくの如く凡ての現象にはこの兩面がおのづから具はつて居るもので、信仰と云ふ心的現象に於てもまた當然此兩面が具はらねばならぬものと思ひます。若し事實を反省して自分に他へ及ぼす氣持が起つて居ないならば、それは其人の信仰がまだ生長して居ないからです。然しかうした願ひも、事實上我が力の不足が常に痛感されるもので、茲に一層如來の加被護念が念願され、いやが上にも自分の信仰増進が望まれる譯です。そこで理想として淨土へ往生した後自分をすっかり完成させ、その六神通の力を以て自由に自在に他の大勢の人々の悩みを除くやうにして上げたいと思はざるを得ないことになるものですから、さて

信仰上の御相談に應じます。御質問はハガキに住所氏名御明記の上、信仰相談係宛御送附のこと、誌上匿名は可。(係)

こそ善導大師もかうした發願文をお書きになつたものと察せられます。其上菩薩には「度衆生願」と云ふものがあつて無量無邊の衆生を濟度し盡さうと誓願を立てるので、一分の煩惱をこゝさらに残して娑婆出現の手がかりとする由です。觀音菩薩の如きも普門救済の爲に「大慈悲を以ての故に己に菩提を得れども捨て、證せず」と云つて佛果を證得し得る程の力があるけれども、敢へて其れを残して居られるのは今の「度衆生」の悲願があるからです。だから私達と云へども念佛に依て淨土に往生したならばこの「已得菩提捨不證」の立場が取れない筈はないと思ひます。またお質ねの「十方に分身する眞如的感應」とか「頭出自沒の流轉的隨緣に依る濟衆」とか云ふ御言葉が何う云ふ意味の御言葉か、私には分りませんけれども、そうした御言葉は寧ろ必要のないことと思ひます。況して善導大師の此お言葉は名の示す通り發願であつて

「さうありたい」と云ふ念願なのですから、既定の問題として論議する性質のものとは違ふものと思ひます。唯だ問題はそれが可能なりや否やと云ふことです。元よりこちらには力がないのですから、さうなる爲めには如来様の御力をまたねばなりません。随つて如来様の絶対力を信ずる私達としては「如来様に依る限りに於てそれは可能なり」と信ずるだけでよいと思ひます。理窟が何うあらうとこちらに「度衆生」の念願があり如来様の方に絶対の御力があるのです。だから如何なる形に於ても出来ない筈はないと信じます。

また「十方界に入る」爲には「四大分離」して淨土に往生しても再びその誓願に依て新たに「四大和合」の肉身を得られる筈です。また四十八願の中に示されてあるやうに「諸佛の國に遊んで恒沙無量の衆生を開化し無上正眞の道意を樹立せしめ得る」程の「常倫を超出」した「徳」が與へられると云ふことですから、私達はそれを信じて行つたらよいと思ひます。それが「感應的」なものか「隨緣的」なものかは其人の誓願の如何にも依ることとせうが、また兩方一緒にも出来るものとも思ひます。現實の世界に於ても例へば甲

なる人が乙と云ふ人に何か質問をしたとして、それに對して乙が答へた場合、それは隨縁のものではありませんけれども、若し其處に發言された言葉以外に甲乙相互間に人格的交流が行はれて、言葉以上の何物かが感得されたら、一種の感應があつた譯です。煩惱具足の凡夫の間に於てすらさう云ふ作用が同時に行なはれるのですもの、今の問題に就ても何つちか一方に片寄せて決めてしまはなくてもよいではありますまいか。どうぞ一心にお念佛して貴君の誓願をいやが上にも太らせるやう御精進下さい。

淨土宗の要綱が寫眞て一目瞭然！

寫眞百三十五

特製アート紙・美術折本
定價 四十錢 送料 六錢

淨土宗要覽

三井 晶 史 編

傷病兵慰問、晋山式、慶讃會、
中學校記念品等に絶讃の書。

内 容

(一) 宗歌月影、(二) 本尊阿彌陀如来、(三) 教祖釋迦牟尼如来、(四) 高祖善導大師、(五) 宗祖法然上人、(六) 經典、(七) 支那淨土五祖、(八) 日本鎮西上人、記主禪師、了惠、聖問、而譽、(九) 管長(一〇) 總本山知恩院(一一) 四大本山(一二) 二十五靈場(一三) 由緒寺院(一四) 大檀林(一八) 十八檀林(一九) 全國著名寺院(二〇) 宗務所(二二) 宗立學校(二三) 宗立中等學校、宗門關係學校(二三) 社會事業現勢(二四) 開教區現勢(二五) 祖師年譜、淨土宗聖日。

何れも寫眞掲載、適切簡明なる解説あり。
淨土宗の大綱を知る唯一無二の書。

東京市豊島區池袋一ノ五四〇番
振替東京九〇八七〇番

みをしへ社

銀仰運動ニユース

本會一段の躍進を期して

組織の充實整備へ

近く成案を發表の豫定

法然上人鐵仰の大旗を高く掲げ、全淨土宗の支持の下に本會が夙々の聲をあげてから五ヶ年、機關紙「淨土」も五十巻を發行し、支部數も全國に五百をかぞへ、講演會、支部例會、別時念佛行事等の開催數、參加人員延數を計算すれば、大なる數となり本會の基礎は、固たるものとなつた。然しこの大躍進に安んずることなく、更に時局下精神動員之急務を痛感してこれに最も適當した組織をとり、更に前進を続けるため、本部に於いては兼ねてから内外組織の改革に

就いて案を練つてゐたが、この程成案を得るに到つたので、理事會を開いて、最後案を決定、近く發表の運びとなつた。支部員及び會員諸君に於いても過去の活動の經驗から、本會組織の改善に就いて遠慮ない御意見をお送り願ひ度い

婦人部慰問行

本會婦人部では四月二十四日大藏臨時分院に長唄舞踊演藝を組織しての慰問行をなした。賑やかな一行に白衣の勇士は大喜びであつたと部員は鼻高々である。



本部だより

◇淨土宗務所別館

階下にあつた本部

事務所はこん度階上に引越しました。以前よりもずっと明るく風通しもよろしい健康地帯です。から御近所にお出での節は是非御立寄下さい。

◇本會も態々組織を充實させて非常時局に對處することとなり本部員一同はりきつております

◇戦線にゐる組織部の辻少尉が最近某所に便りをよせました。南昌一番乗りをやり感涙にむせ

んだとのことでした。

◇南支戦線の東君(編輯)はマラリヤにかゝつたとの報に一時は心配しましたが間もなく全快目下殘敵掃討に奮戦中。

◇眞野正順師は追々快方に向はれております。

陸海軍病院慰問 「淨土」寄附者芳名

四月十日より五月十日まで

壹百圓 大阪市末王寺區勝山通

一圓 廣島縣廣中町 石井 通徳

二圓 兵庫縣武庫郡精道村 木村 幸子

一圓 和歌山縣湯崎溫泉場 池田吉兵衛

一圓 東京澁谷區羽澤一二 田邊 屋

一圓 攝河泉教區泉南組 阪本 彌八

一圓 埼玉縣栗橋町 西林 寺

十圓 山口縣柳井町 淨 信 寺

六圓四十六錢 東京淀橋區角管 井原 祐善

一圓 西宮市屋敷町 相馬 黒光

一圓 山口周西組淨西寺抜 上野宗太郎

五十錢 奈良縣高田町 吉川米次郎

一圓 古田マツヨ 脇本直次郎

浄土宗大陸視察團

開教調査に出發

木村、江藤兩理事も參加

本會理事木村玄俊師（小石川傳通院貫主）藤本了泰師（芝天徳寺住職）マハヤナ學園長長谷川良信師等の浄土宗大陸視察團北支班一行は五月十四日東京驛發視察の途にのぼつた。

同南支班には本會理事、浄土宗教學部長江藤滋英師參加一行は

九日長崎出帆上海に向つた。

右視察團には開教上の調査と云ふ重要な目的もあり、且つは先きに浄土宗の僧籍に入られた牧少將らの大陸各地の戦跡巡回向のこともあり、浄土宗今後の大陸發展に期待されるところが大きい。

なほ、視察團に參加された三理

東京附近例会案内

淨き友の會座談會

六月四日（第一日曜日）

六月十八日（第三日曜日）

六月廿五日（第四日曜日）

各午後七時より

會場 本郷區東片町七八橋本方

（電車白山上下車、美容大學院）

講題 阿彌陀經講話

講師 中村辨康師

良忠寺支部例会

六月六日午後六時より

會場 横濱市鶴見區矢向町

良忠寺に於て

（南部線尻手下車）

講師 佐藤賢順師

本部婦人部例会

六月三日（土）午後一時より

會場 芝公園明照會館樓上

（増上寺下車、プール隣）

講師 佐藤賢順師

事からはその立場からする大陸實情の報告を本誌にも寄せられる筈で、宗教人の見たそれらの現地報告はまた興味深いものがあらうと思ふ。

誌代改定に就いて 本誌も七月號よりいよ／＼値上げをいたします。××頁廣告を御参照下さ

全國巡錫の準備進む

支部の御申込はお早く

前號に發表した本部員の全國巡錫に就き中村、佐藤兩師は巡回手續きに關して本部に於て會合を重ね、準備を進めてゐるが、各支部からの問合せも既に山積し相當有意義な運動となる見込みで一同緊張して計畫の整理に當つてゐる。六月半ば頃には大體のプランを決定しそれに従つて行動を起す

- 二 同 大阪府泉南郡尾崎村 池田 フサ
- 五 同 熊本縣牛深町 天附教會所報
- 五十錢ゾ、杉本モヨ、杉本コト、佐々木チエノ、佐々木千八、良本秀子、佐々木クヨノ、佐々木ソマ、杉本タネ、佐々木ワケノ、佐々木ヨネ
- 一 同 東京市淺草區南清島町 朝倉 馨
- 三 同 釧路市米町 福山仙太郎

一瀬君著作集出版 本誌編輯部員一瀬直行君は兼ねて芥川賞の豫選をも通られ新進作家として賣出して來たが、近く某書店より著作集を出版される運びとなつた。



死なない身となる

日常勤行式解説

中村 辨 康

(九) 回向文

(誦經の後、淨土往生の心を一層強化する爲に唱へ奉る)

彌陀本誓願

極樂之要門

定散等回向

速證無生身

彌陀の本誓願は極樂の要門なり。

定散等く回向して、速かに無生の身を證せん。

(觀經玄義分卷第二ニ出ツ)

(意譯)

人身受け難く佛法また遇ひ難きにもかゝらず私のやうな愚鈍な身で、しかも彌陀の昔から六道に流轉して居たのであるが、今幸ひにして釋迦牟尼世尊の、末法の衆生への遺しものとして説き

置きたまへる、極樂往生への要門たる、阿彌陀佛の本願誓願の餘き御法に逢ふことの出來たのは本當に有り難い事であります。だから今までに定心でなした善行や、散心でなした善事など、それは殆んど取るに足らない些かのものであるかも知れませんが、それ等を悉く淨土往生への願望に振り向けて、速かに極樂に往生して生死なき身になりたいものでございます。

(備考)

此文は善導大師の書かれた觀無量壽經の解説書の最初の「先づ大衆を勸めて願を發し三寶に歸せしむ」と云ふ一節の中の一部である。

善導大師は「大衆に勸めて發願せしむ」と云つて居られるけれども、大部分御自身の氣持を云ひ現はされたものである。だから其終りの方に「我菩薩藏頓教一乘海に依て、偈を説いて三寶に歸し

佛心と相應せん。十方恒沙の佛よ。六通を以て我を照知したまへ。今二尊の教に乗じて廣く淨土の門を開かん。願くは此功德を以て平等に一切に施し同じく菩提心を發して安樂國に往生せんと云はれて居る。眞宗などでは之を「歸三寶偈」と云つて御經の時に讀んで居る。即ち

「道俗時衆等 各發無上心 生死甚難厭

佛法復難欣 共發金剛志 橫超斷四流 云云」

の偈である。委しくは四帖疏玄義分を見られたい。

また「回向文」としては此外に色々ある。それを今一々解説するのは紙數を要する事でもあり、中々面倒でもあるから、唯だ文句だけを二三掲げて御參考に資する事にする。

其佛本願力 聞名欲往生 皆悉到彼國 自致不退轉。

門々不同八萬四 爲滅無明果業因 利劍即是彌陀號 一聲稱念罪皆除。

一切精靈生極樂 上品蓮臺成正覺 菩提行願不退轉 引導三有及法界。

またかうした回向文のあとでは必ず「十念」と云つて「南無阿彌陀佛々々」と十遍稱へる習慣になつて居る。この十念の事に就ては「五重相傳」の時に教授されるもので、普通には云はない定めなので、解説を遠慮して置くが、要は「回向文」の氣持を一層確實にする爲に唱へるものだとお考へ願ひたい。

また讀經のあと、此「回向文」を讀む前に志す靈を弔ふ爲の別回向をする事もあるが、それは中途の回向であつて、此次に總識や念佛があるのであるから今の讀經の時は「回向文」だけに止めて、精靈への別回向は「念佛一會」のあと「總回向文」の前にする事にした方がいと思ふ。之は土地の習慣もあつて一概には云へないことかも知れないが、出来るならば、さうしたいものだと思ふ。

講 贊

淨土の三部經は何れも念佛を勧めて居る。

念佛は云ふまでもなく阿彌陀佛の御名を稱念することであり、それはまた阿彌陀佛の本願が基になつて居るのである。但し觀無量壽經及び阿彌陀經には明らさまに「本願」のことは説かれて居ないけれども、それは無量壽經にその緣由が委しく説いてあるからであつて、觀無量壽經や阿彌陀經が「本願」に無關係のものでないことは今更云ふまでもない事である。

元來「本願」と云ふのは「もとのねがひ」と字で示すごとく、過去の世に於て發した「願ひ」即ち「宿願」の意味である。随つて現在に於て起した「願望」は之を「本願」とは云はず「發願」又は「誓願」と云つて居る。

菩薩は一般に「四弘誓願」と云ふ「度斷知證」の四大願を立てる

のであるが、此一般的な「願」の外に特別に菩薩各自の意向に依て、或は淨土を建立せんとし、或は娑婆に願はれて直接衆生救済をなさんと云ふやうに、夫々その性格とか志望とか異なるものがあるので、其れを一般的に四弘誓願の「總願」より別に「別願」即ち「本願」と云ふものを立てるのである。

阿閼佛の二十願、藥師佛の十二願、釋迦佛の五百願、彌勒佛の十願、普賢菩薩の十願、觀音菩薩の救苦願など皆なそれで、阿彌陀佛の四十八願は阿彌陀佛がまだ法藏菩薩と云つて居られた時立てられた「願」なのである。

しかも其四十八願の中の第十八番目の「願」は他佛の本願に比して最も特色のあるものであり、且つ阿彌陀佛の阿彌陀佛たる最も重大な「本願」であり「誓願」であるから之を「王本願」とも云つて居る。此王本願なくしては阿彌陀佛の大慈悲たる所以も明らかにされないし、他の四十七願は此の「第十八願」と云ふ根幹の上に派生した「願」であつて「第十八願」こそは阿彌陀佛の「全部」であるといつても過言ではないのである。

佛教では二轉の妙果を得る事に依て菩薩は完成されると云つて居る。完成された菩薩は「佛」である。然して其二轉とは煩惱の根本たる「無明」を轉じて「覺明」即ち菩提となし、煩惱に依て生死流轉せざる可らざる状態を轉じて「涅槃」即ち死なない身となすことである。しかも「死なない身」即ち「無生身」は「無量壽」を獲得した

事であり、明るい「覺明」を悟つた事は「無量光」を得た事であるから、畢竟菩薩が成佛するには「無量壽、無量光」即ち「阿彌陀」を得なければならぬのであつて、諸佛は皆な「阿彌陀」を得た人であり「阿彌陀」なしには「佛」にはなれなかつたのである。然るに「阿彌陀」を得た一切諸佛が自ら「阿彌陀」を名乗り得ずして、唯だ一人の法藏菩薩の成佛にのみ「阿彌陀」の名を譲つた所以は、法藏菩薩の「本願」が傑出して居るからであり、別けても四十八願中の第十八の「念佛往生の願」が素敵もない「萬人必至」の最易にして最勝なる實効大利の實踐法門だつたからである。

「佛心とは大慈悲是なり」であるから諸佛は皆な同じく「大慈悲心の持ち主」であつて、何れ劣り勝りはない筈である。其點のみで云へば釋迦牟尼佛も藥師琉璃光佛も阿閼佛も其他如何なる佛も皆な「阿彌陀佛」であるべきであるが、均しく「衆生無邊誓願度」の大慈悲たるには相違がないけれども、何れも救済の條件が六ヶ數く夫れ夫れ獨自の立場に立つただけそれだけに、内面的には皆な「阿彌陀」であり乍ら、その總名的な名を名乗らず各々獨自の名を名乗らざるを得なかつたのではあるまいか。

と云ふのは、諸佛は何れも「業力」に忠實であつた。即ち佛の三不能と云つて

- 一、定業を滅する事能はず
- 二、無縁の衆生を度する事能はず

三 衆生界を盡すこと能はず

と、定まつた業力を如何ともする事が出来ないものであるから、戒定等の修業に依て衆生が自ら煩惱を亡して業力の消滅を計らねばならぬとして居られるのである。

然るに觀音菩薩は「定業亦能轉」の悲願を立てられ、阿彌陀佛は増上緣力を以て業力をも攝取する「念佛往生」の本願を成就せられたのである。之は實踐的には「成佛道」と「往生道」との相違であり、理論的には「因果論」と「緣起佛」との相違である。

例へば蓬は個性の上から一本立の時は如何に支柱を立て、眞直にしやうとしてもものびるまにまに曲りたがるのであるが、之を麻の中に植ゑる時は周圍環境に支配されて自然に眞直に伸びる。之と同じく「成佛道」は獨り立ちさせて行かうとするのであるから「六波羅蜜」などの支柱を立てない事には眞直に素直に向上の一路を進む事が出来ない。少しでも氣がゆるめば直ぐ横の方へそれて仕舞ふのである。然るに「往生道」は素直な環境の中に入り込むのであるから其周圍の他力に順應して自然にズンズン上向きに眞直な邁進が出来る譯である。

法然上人が證眞法印の間に答へて

「成佛は難しと雖も往生は得易し」

と云はれたのもかうした理があるからである。

私達は今不思議の因縁にもよほされて、此「往生淨土」の要門た

る阿彌陀佛の本願「念佛往生の願」に遭ひ遇ふことが出来たのである。誠に優曇華の花咲き得たる思ひであつてよいと思ふ。

その昔し摩竭陀國の阿闍世太子が提婆達多にそそのかされて、父王頻婆娑羅を押し込め王位を奪つたが、母の韋提夫人がそれを悲しんで、自分の身體を清め酥蜜を塗り其上に小麥粉をふりかけて固め、頭や頸や胸に懸ける璽珞の玉の穴に蠟で底を作つて其一つ一つに葡萄の汁を盛り入れ、密かに夫の頻婆娑羅王に奉つた。それで王は毎日饑餓にも苦しめられず健やかに命脈を保つ事が出来たけれども、其事が新王の阿闍世に判り、新王は怒りのまゝに生母韋提夫人を奥深い室内に閉ぢ込めて、再び外へ出る事の出来ないやうに嚴重に禁制せしめられた。

韋提夫人は現在我が生みの子である阿闍世が、如何に政權を早く欲しいと思つたと云へ、惡友の甘言に乗つて父王をほし殺しにしやうとするやうな極惡無殘な行爲をしたことは、全く世は淺季で世道人心が顛覆してしまつたからである。それにしても十六大國の隨一と稱せらるゝ我家の醜い此の内紛は、宿業の致すところか、將亦浮世の果敢ない運命の弄びか、かかる濁惡不善の充ち満つる娑婆は、唯だ目前の榮花に酔つていつまでも執着して居るべき地ではない。と云つて煩惱の爲に左右せられて居る凡夫の悲しさ、たとへ唯だ厭ふまゝに此身を捨て、見ても六道輪廻の憂き目を見續けて行くだけである。今からでも遅くはない。何とかして釋迦牟尼世尊に御

目にかゝつて解脱の御法を承りたいことではあるけれども、それも餘りにとらはれの身のあつかましい次第であるから、せめては日頃親しかつた阿難尊者と教化力の偉大な神通第一の稱ある目連尊者とにお目にかゝつて此苦惱脱却の教を受けたいものであると念願して居ると、不意に釋迦牟尼世尊が目連阿難の二人を連れて御來訪下され、色々と諸佛の淨土の相を御見せになつたのであつた。

然し韋提華夫人としては「無憂惱處」たる諸佛の淨土が何れ勝り劣りの有るべき筈もないけれども、願くは「阿彌陀佛」の淨土こそ最も望ましい世界であるから、どうぞ思惟（觀相）と正受（三昧）とを教へられんことを御願ひ申し上げたのである。

そこで釋迦牟尼世尊は韋提華ばかりでなく、未來の一切衆生が人生の苦惱を厭つてそれから脱却しやうとしても、力なき爲に脱却し得られないであらう事を察せられ、廣く定善十三觀の觀法と散善三福九品の往生法とお説きになつた。それが謂ゆる「觀無量壽經」であるが、今まそれを私達自身の分に振り當てて考へて見ると、第一の日想觀から第十三の雜想觀までの定善としての觀法は到底及びもつかないものである。昔は天王寺の荒陵で浪花の海に沈む入日を拜み乍ら「日想觀」をした人もあつたらしいけれども、偕てその日想觀が成就したところで、次の「水想觀」になるともう中々想像するだけでも困難になつて、さじを投げざるを得なくなるのである。

また散善の方を見ると、諸戒行を具すとか、諸大乘の經典を讀む

とか、またはその第一義を解すとか、無上道心を發すとか、慈善事業をなすとか、人間五常の道を完全にすると云ふやうな上品中品の中に説かれてある如き善行爲は、よしさうした願ひはあるとしても、是亦容易な事ではなく誰しも自惚れ強く「我善人なり」との自信は持てない。結局散善の中でも最下等の下品の該當者に過ぎないのである。

だから此の「回向文」に「定散等しく回向して」とあるけれども、事實回向し得る程の「行徳」は持ち合せて居るとは思へない。言ふには一寸口巾つたいことでもあり、また氣耻かしい次第である。然し今此勤行式をこれまでずつとやつて來て幾分か心も澄み、また淨土の經典を讀誦しつゝ、多少なり其意味を味つて來たので、其「心の澄んだ」ことを「少分の定善」と見、經典を「味つた」ことを「散善の一分」と見れば、それは皆な「淨土への信仰増進」の爲のものです、最初から「回向」されて居るものではあるけれども、改めて更にもう一度「回向」の氣持、即ち「淨土への歸一」の氣持を強めて見る事も決して無駄ではない。

また次ぎには「觀無量壽經」の終りの處に、韋提華夫人はその五百人の侍女と共に、此定善散善の教へ、別けても「念佛」の御法を承つて、夫人は

「一心に歡喜を生じ、未曾有なりと歡じ、廓然として大悟し、無生忍を得」

侍女達は菩提心を發し淨土往生の願心を生じたと傳へられて居る。即ち觀無量壽經が「定散二善」を説いては居るけれども、其中心の目的は「散善」の中の「下品」にあるのである。「下品」は「往生法」としての「念佛稱名」を勧めて居るのである。だからそれを聽聞した人は或は「無生忍」を證得し、或は「願生の心」を發したので、釋尊も王宮での説法を了るとすぐ阿難に

「汝よくこの語を持てよ。この語を持てと云ふのは、即ち此の無量壽佛の御名を持てと云ふ意味であるぞ」

と、特に「阿彌陀佛名」の執持に就て念を押して居られるのである。

侍女達の起したと云ふ「願生心」は「淨土」への信仰であり「念佛」への歸順である。此の歸順信仰はやがて「念佛」の實踐となり、實踐に依て「生死脱却」の可能性が確信せられて来るのは當然な事である。

そして此の「生死脱却」の確信こそは「無生忍」そのものであつて、草提華夫人はさすがに深刻に人生苦を體驗し「我身の拙さ」を痛切に味つて居たから、オブザーバである侍女達にも勝つて釋尊の説法を強く受取り得たので「無生忍」の心境に達したのである。

一體「無生」とは「生無き」こと即ち反對に云ふと「不死」の事であるが、一般に考へる「不死」は此肉體の「不老長生」を意味するものであり、且つそれは相對的のもので「生」に對する「死」「死」に對する「生」であつて、畢竟付きものであるから相對的な「生死」

を離れずには絶對的な「生」や「死」を得ることは出来ないのである。さもないければ何處までも輪廻的に生死を繰返すのであるから、本當の「永生」は「無生死」の姿でなければならぬ。随つて相對的な「生死」を超越した意味に於ての「永生」を云ひ置はす爲に「無生」と云ふ文字を使用した譯である。また「忍」とは「認」であつて即ち「確信」したことであり「體認」したことである。

だから此「回向文」に云ふところの「無生身」とは精神的な「無生忍」が事實に體證され確證された事であるから、畢竟「淨土へ往生」して「無生」の「生」を證得したことを意味するのである。

それを今ま私達は「願望」として心に念ひ言葉に表現したのである。然らば私達「念佛」を信じ「念佛」を唱へる者として、ハッキリとそれを心に意識する意識しないに拘らず、確かに「無生」へのあくがれとそしてその可能性とが承認されてよいことを喜ぶべきではなからうか。

少くとも私達は精神的には彌陀の中に歸入して居るのである。即ち「無量壽」の中に融合して居るのである。だから何うしたつて念佛しなければならぬやうに導かれてしまつて居るのであるから其處にホンの一分ではあらうが「無生忍」の「忍」があつてよい譯である。

さあ、もう行く處まで來たやうな氣がする。是からの「勤行式」は私達をどう云ふ風に導いて呉れるであらうか。前途は實に坦々た

る大道である。げに念佛道は「安樂道」であり「易行道」である。

(字 解)

彌陀本誓願——阿彌陀佛の本願は一般に四十八願と云はれて居るが、經典に依ては二十四願、三十六願、四十六願等となつて居る。それは廣略の相違であつて大した問題ではない。然し念佛往生の願こそは本願中の本願即ち王本願と云はるゝものである。

極樂之要門——極樂は阿彌陀佛の淨土であるが、名稱は安樂、安養、妙樂、清淨、一切樂莊嚴其他種々の異譯や異名があるけれども「極樂」と云ふのが一般的である。要門とは「肝心要の入口」と云ふ意味で、極樂へ行く可き最も肝要な御法と云ふ意味である。

回向——廻向とも書く。廻轉廻向の義と云つて自分に爲した所の功德善根を他の方向へ轉向せしむること、菩提廻向、衆生廻向、實際廻向の三種ありと云はれて居る。然し淨土教では往相廻向、還相廻向の二とする。委しくは何れ「總廻向」の下で申し上げることにしたい。

速證——速ははやくの意味であり證は體驗することである。

S.S.S.

金はンベ 亂賣 すで 優にンベ 金

金合スエンサる ！をンベ



¥150以上

★ 筆年萬合金・スエンサ

編輯後記

△隣りの部屋で誰か夏蜜柑を喰べてゐる。酸っぱいなあ、と云つてゐる。夏のはしりだ。

夏蜜柑の色のやうに、戸外の日射しも夏らしい色彩を濃くしてゐる。

△昭和十四年も正に中ばを過ぎやうとしてゐる。何時もながらうかつな人間共ではある、と夏蜜柑に笑はれてゐるやうな気がする。

△増上寺法主大島大僧正が本號の巻頭で一死報公の精神と信仰に就いて語られる。蓋し時代の精神を單的に衝いた現代高僧の金言である。

△相馬黒光女史が深い信仰と共に本會によせられた御好意は感謝のほかはない。「今年の花祭り」の短い文中には信仰の本體に就いての鋭い示唆がある。

△牧少將が淨土宗の僧籍に入られた事は既に有名な事實であるが少將は目下大村桂藏帥らと共に各戦跡を巡錫せられつゝあり見山任達(望洋)帥の隨筆「法衣の牧少將」はその間の消息に就いて語られてゐる。

△福田行藏上人は淨土宗の名僧としてばかりでなく、近代高僧中の第一に位する大徳として有名である。今、上人の孫弟子に傳はれる福田有誠師が語られる一骨を喰ふ一上人の逸話はいまなほ、信仰と處世の生きた教訓であらう。

△吉田絃二郎先生の隨筆には益深い先生の信仰の境地が描き出されてゐる。いよく寂しさに徹せられるその境地には思はず同感の涙を誘はれるのである。

△ニュース記載の如く鑽仰會は再度新たな躍進を目ざして準備してゐる。本誌も愈々その眞面目を發揮しやう。

△本會出版物の御注文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番

△御注文の場合には種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さいますやう。御送料をお忘れなき様お願い致します。

△勝手乍ら代金引換は一切お断り申上ます。

△その他お問合せは往復はがきかまたは返信料同封で、御願します。

△會員で御住所御變更の方は現住所と共に前住所をも御明記の上御通知下さい。

△本誌掲載の廣告は一切左の店で取扱つてをりますから廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひます。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社

東京市京橋區銀座西七丁目
電話代表銀座 五七六六

淨土 六月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十年四月三日印刷納本
昭和十四年六月一日發行

(定價十錢)

編輯兼 眞野 正順

印刷人 赤尾 光雄

發行所 法然上人鑽仰會
東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價(本誌)金十錢
(送料五厘)

一ヶ年金一圓二十錢
會費 (送料不要)

法然上人鑽仰會刊行圖書

東京市芝區芝公園明照會館
振替口座東京八二一八七番

中村辨康著

(四六版一三〇頁總ルビ付)

法然上人の信仰生活

定價三十錢
送料六錢

中村辨康著

(四六版八〇頁總ルビ付)

信仰讀本

定價二十錢
送料三錢

藤井實應編

(増刷中)

菊半截一四四頁
總ルビ付

法然上人法語抄

定價三十錢
送料六錢

佐藤春夫著

特製ノート型、天金
十二ポ總ルビ、三〇〇頁

法然上人
別傳 掬水譚

定價四圓五十錢
送料二十二錢

中村辨康著

(四六版七〇頁總ルビ付)

講話一枚起請文

定價十錢
送料三錢

大野法道著

(四六版六〇頁總ルビ付)

法然上人

定價十五錢
送料三錢

中里介山著

(三六版二五〇頁クロース裝)

法然上人傳

定價六十錢
送料六錢

佐藤春夫・吉田絃二郎・岡本かの子
倉田百三・郁芳隨園著

(増刷中)

(四六版總ルビ付)

我が信仰

定價六錢
送料三錢

法然上人鑽仰會編

(菊版一一〇頁總ルビ付)

念佛讀本

定價二十錢
送料六錢

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十四年五月廿日印刷納本 昭和十四年六月一日發行

淨

土 第五卷 第六號

定價金十錢 (送料五厘)
滿鮮臺灣等
外地定價金十一錢